
異世界大掃除？

恋夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界大掃除？

【Nコード】

N9900Q

【作者名】

恋夢

【あらすじ】

爽田絵衣十八歳、何故だが、トリップしたようです。そしてそこから、更にトリップ。に、二度のトリップは、時差があつて酔います真面目に。神様（らしき妖精）に手渡された金の雑巾を持って、いざ出陣！（チート能力ゼロ）異世界で出会った不潔男と豪快シンデレラ、粘着質王子に熱血青年を交えて（または巻き込んで）の逆ハーレムです。シリアス要素0、コメディ100%でお送りします。

000：掃除婦になりたい

「それで？進路の希望はあるのかい？」

「ええまあ、なくもなくもなくもなくもないです」

「…つまり、あるんだな。で、希望は？」

「掃除婦になりたいです。そして、“掃除のお姉さん”…略して“ソーネ”と呼ばれ、その美しさと掃除の腕前が認められて、芸能界デビュー。その後は『掃除婦は見た！』というテレビドラマで活躍し……、」

私の名前は爽田^{サワタ}絵衣。

進路希望紙に掃除婦と書いた高校三年生だ。

「ちぐしよー、何で駄目なのよう」

肩を怒らせて帰り道を歩く。

あの先生が説教してくれたおかげで、終電を逃してしまった。
学校から私の家まで何キロあると思ってるのよ。

「あの先生、将来禿げればいいのに」

私に説教をした先生は、残念ながらイケメンで、髪もふさふさ。
だけど、ああいうタイプは将来禿げる！

そして『昔はかつこよかったのにねえ』と罵られ、イケメンの世界から落ちるんだ。

そこまで考えると、気分がすっきりする。

もういいや、怒られたことなんて気にしないし。

あの先生によれば、

『真面目に考えなさい！お前は頭がいいんだから、大学へ行くんだ。掃除婦なんてたまったもんじゃない。あんなもの給料は安いし汚いし、それに何より、落ちこぼれがやる仕事だぞ』

だと。

説教されるうちにムカついてきたから、一発ぶん殴ってきた。か弱い乙女だと思って甘くみられてたけど、容赦はしない。掃除を馬鹿にするヤツは、許しちゃおけないもんね。

「美しいは正義！綺麗が一番！清潔第一！」

この世を汚す者は、私が許さない！！

ふと、道ばたに転がる空き缶が目に入る。

うおお、許せん…！！

こんな所にゴミを捨てるなんて……何処の何奴か知らないが、何様のつもりだチクショー！

シュ、と私は鞆からゴミ袋を取り出す。

私の愛用品、名付けて「ゴミゴン」。

これで今日もこの町を、ゴミの魔の手から救うのだ！！

素早くゴミを拾う私。

空き缶、煙草、お菓子の袋、コンビニの袋。

種類はいろいろあるけれど、どれもみんなゴミ。

全く、ゴミを捨てる人は、片付ける人のことを考えてくれないと困る。

「それに、毎回家で捨てるとお母さんが怒るんだよね…」

別にいいじゃん。

環境破壊をしている訳じゃないし。

ただ、みんなが捨てた分のゴミを私がまとめて分別したりしているだけで…。

ちらつと時計を見る。

おっと、そろそろ日付が変わりやがる。

あのクソ教師め、軽く五時間は説教してくれたから、うら若き乙女がこんな時間にトボトボと歩いて居るんだぞ。

絶対いつか禿げるな。

てっぺんだけ禿げて、十円禿げならぬ千円禿げにでもなりやがれ
ってんだ。

「急がないと…」

こうして私は、少し早足で家へと向かっていった。

これから、どんなことが起こるか知らずに。

ゴミを見つけるたびに、愛用ゴミ袋「ゴミゴン」へと入れている
ので、気づけば袋がパンパンになっていた。

お、重い……ッ

ああ、あと三分で日付が変わる。

サヨナラ今日、コンニチハ明日。

そんなことを考えながら早足で歩いていると、私の頭に何かが当たった。

「いつ…た。何なよう」

私の頭に当たり、そして地面へと落下した物体A。
明らかに怪しい。

暗くてよく分からないけど、黒くて気味悪い物体のようだ。
どう、しようかな…。

一応、ゴミゴンに入れてみる？

落ちてるし（正確には空から落ちてきた）、ゴミといえばゴミだよな。

うん、そうしよう。

ゴミゴンに入れちゃおう！

「よっ…、と」

怖々と手をのばし、物体Aを掴む私の腕。

おし、掴んだ！

瞬時に、ゴミゴンへと投げ捨てる。

さらば物体A！

晴れ晴れとした気持ち、私の心を包んだ、そのとき。

私の心とは逆に、ゴミゴンからは、どす黒い空気がにじみ出ていた。

まるでブラックホールのような…。

って、えええ！？

本当に出てるよ、黒い空気！！

何なのコレ、意味分からない。

「ッヒ…！」

ほ、ホラー映画じゃあるまいし……！

こんなこと実際にあるわけないよね、うん。

だいたい、私は非科学的なことは信じてないし？

…と、必死に現実逃避を試みた。

うおおおお、何だよこの雰囲気。

怖い、怖すぎる。

お化けなんかどうでもいいけど、何よりも怖いのが、この“不潔”なところ。

汚い、不潔。

ううう、こんな所にずっと居たら、私怖すぎて死んじゃうよ。

そう思っ、逃げだそうと一歩足を踏み出した。

が。

あらららら？

吸い込まれる……って、はい！？

「うわっ、」

スッテンコロリン、見事に転ぶ。

そして更に、ゴミゴンへと吸い込まれていく私。

え、えええ。

スイマセン、現状が理解できません。

ゴミゴンがブラックホール化して、私が吸い込まれてるとか理解できてもしたくないです。

ああゴミゴン、いつから貴方はそんな不純な子になったのですか。

思いだしてください、私と初めて出会ったあの頃を。
そして助けて。

えすおーえすですゴミゴン。

へるぷみーなのですゴミゴン。

とにかくたすけるばかやろーなのですゴミゴン。

と言っている間にも、どんどん吸い込まれる私。

ああああ、ついに私もゴミゴンの餌食に……！！

お母さんお父さん、掃除ばかりしてる娘でごめんなさい。

今まで掃除と炊事と洗濯しかやらなくてごめんなさい。

色恋沙汰にはとんと疎くてごめんなさい。

親孝行とかは……まあ一応したってことにしておきます。

爽田絵衣、ゴミゴンに吸い込まれて人生を終えます。

サヨウナラ。

願わくば、来世では掃除機に生まれ変わりたいものです。

……。

ココハドコデスカ。

「あれっ!？」

聞き慣れない声。

日本語……？

一応通じてるみたいだけど……。

何語なんだ、コレ。

そしてこの声の持ち主は一体誰？

「君誰!？」

「それはこっちが聞きたいんですが？」

そう聞き返せば目の前の人は困ったような顔をする。
にしても変わった格好をしている。

まるでサンタクロースだ。

……かなり若いけど。

真っ赤な衣装に黒いブーツ。

白い髭ははえていないし、顔はイケメンで若いけど、サンタクロ
ースに見えなくも………どうだろう。

髪は綺麗な青。

というか、海の色。

瞳は髪の色と同じ海色。

「あつもしかして……」

「はい??」

「君って、マユミと同じで、人間？」

当たり前だ。

一体何に見えると言っのだろうか。

これで「豚に見えた」とか言ったら殺す。

というかマユミって誰だよ。

「そうですけど……」

私がそう答えると、相手はあからさまに嫌な顔をした。
しまったーみたいなの。

何、私が人間だと何か悪いの！？

「おいら、召喚しちゃったのか…」

……ゴメンナサイ言ッテイル意味ガ分カリマセン。

「どついう意味ですか？」

「え？だから…、」

一旦言葉を切るサンタさん。

そして、目を泳がせてからこう言った。

「君は、おいらに召喚されたんだよ。あー…そっちの世界で言つと、
“とりつぶ”かな」

………わつつ？

000：掃除婦になりたい（後書き）

初めまして、ゆながりか改め恋夢です。

新連載~~~~！

とにかく甘く、とにかく逆ハーですwww

頑張ります…！

主人公の描写がまだ全然ですが、次回かその次くらいに…。

一週間に一回くらいのペースで更新予定です。

私の物語ではいつもそうですが、主人公がおかしいです（いろんな意味で）

それでもOK！な方のみ続きをご覧ください。

また、苦情は一切受け付けません。

誤字脱字・アドバイス等は受け付けます（というか是非！）

感想・評価もビシバシ（？）しちゃってください。

そしてフィクションです。

では。

001：頭痛と腹痛と吐き気と刺激臭（前書き）

初っぱなから、読者に引かれそうな文章を書いております（え。
スイマセン。

001：頭痛と腹痛と吐き気と刺激臭

「わっつわっつわっつわっつ」

「おーい、聞してる？」

「わっわっわっ、わーっ！っ！っ！」

「うおっ」

大声で叫ぶ。

どういう意味？

全く訳が分からない。

「トリップってどういうことですか若サントさん」

「何その若サントって？」

「いいから説明しやがれこの若サントめ！全世界の子供に夢を与えているからって調子に乗るんじゃないぞ畜生！何で白髭はやしてねーんだよ、何で美形なんだよー！！」

いけない。

つい本音が。

「おいらはリップル。若サントじゃねーよ？十二月の妖精だな。と言つても、ほとんど神様みてえなもんだけど！」

ははつと軽く笑うそいつ、リップルさん。

…頭狂ってるのか？

妖精？神様？……馬鹿か……？

「んで？その若サントが私を召喚…したんですか？」

「そーゆーこと」

「……戻せ。今すぐ戻せ。地球に返せ、こんな所嫌だ、お前何なんだよ無駄に美形でキモイんだよ、どっかいけ阿呆妖精…じゃなくて神様が」

あらら、また暴言が。

私はコホンと咳を一つしてから、元の話に戻った。

「戻してくれますか、リプルさん」

「無理だよ」

「……なめてます！？なめてますよね、絶対！なめんじゃねーぞコラア」

「な、なめてないなめてない！！」

ワタワタと首を振るリプルさん。

い、イライラする……！

私はこういうタイプの人間（実際には妖精とか神様らしいけど）が苦手だ。

ヘタレなんか大嫌い……！！

「どうして無理なんですか？」

「そりゃ、おいらの天力が足りないから」

天力？

天力って……魔力みたいなものだろうか。

首をかしげる私を見て、リプルさんはあちゃあという顔をした。

「天力のことは部外者には言っちゃ駄目なんだった……！」

「もう私は部外者じゃないでしょう？こうなったら、リプルさん、
アンタにとことん世話になりますからね！」

「え……でも、」

渋るリプルさん。

次は何なのよーもう！

「駄目なんですか!？」

「駄目……ってゆーか……。天界にはもう、マユミっていう女の子がー
人いて……その子で手一杯……じゃなくて、十分だからさあ」

……なるほど、話が読めた。

つまり、この世界には、既に「マユミ」という少女が居て、その
少女の面倒だけで十分だ、と。

私までこの世界にお世話になるのは困る、と。

そういうことですか。

「じゃあ私はどうすればいいのよ！」

「えっと……そ、そうだ！おいらが加護を与えている世界があるか
ら、そこに行けばいいよ！うん、そうすれば一件落着だ！」

まるで名案というふうに頷くリプルさん。

それを私は、訝しげに見つめた。

「ふーん。その世界の治安は？」

「え、」

「戦争とか起きてないでしょうね？」

「そりゃまあ、」

「私の居た世界と全く常識が異なるっていつのはコメンよ」
「だけど、」

「もちろん、私を召喚したリプルさんが、“全て”責任を取ってくれるんでしょうね？」

「うっ」

「安全で楽しくて、前の生活より贅沢な暮らしとまではいかなかったも、一生掃除をしていられるような世界がいいわ」

ビシバシ容赦なく注文をたたきつけていると、だんだんリプルさんがげっそりしてきた。

「だけどすいませんね、私はそのくらいで攻撃をやめるような女じゃないんです。」

「さて、リプルさん。どうします？」

につこりと、天使の笑顔でほえむと、リプルさんは今にも泣き出しそうな顔で私を見つめてきた。

ザマアミヤガレ。

あれから、リプルさんと交渉を続けた私は、何とか「一生掃除が出来そう」な世界を見つけることができた。

それはもう、私にピッタリな世界だ。

舞台は、「シンデレラ」の世界。

「本当に、あそこでいいんだよね？おいら、苦情は受け付けられないよ？」

「結構です。私には掃除しか取り得がないので、シンデレラの世界なんてピッタリですから」

ふふふと不敵に笑う私を見て、リプルさんは額に青筋をたてた。

…失礼な。

乙女のほえみを見て震え上がるんじゃないわよ！

「そ、そんなじゃ、おいからの餞別としてこれをあげるよ」

えっ、なにになに？

異世界トリップ物語でよくある、チート能力かな？

と、一瞬期待した私が馬鹿だった。

「……なんですかこれ」

「何って……金の雑巾だよ？」

ヤメローヤメレー私の異世界トリップ物語のイメージを崩すなあ。
ああ。

衝撃を受ける私。

までまでまで、金の雑巾ってなに！？

確かにリプルさんから手渡されたこの雑巾はピカピカに光ってるけど、普通は逆でしょ！？

雑巾は、「他のモノを光らせる」道具であって、「雑巾自らが光る」道具ではない！

っていつか雑巾が光っても嬉しくねー。

「……」

呆れすぎて言葉も言えない私を見て、リプルさんは何か勘違いしたらしい。

どうやら、嬉しすぎて言葉も出ない状況だと思ったようだ。

…違う、違うよリプルさん。

貴方の感性を疑ってしまいますよ。

「じゃあ、シンデレラの世界にいつてらっしゃい！たまに様子を見に行くからね」

「え、ちょ、待つ…！」

待つて！金の雑巾じゃなくてチート能力をください！

そう言おうとしたのに、リプルさんは私の言葉を聞かずに、「シンデレラ」の世界へと送り出した。

あんにやろっ、人の話を聞けって小学校で教わらなかったの！？

そんなことを考えながら、私は、本日二度目のトリップをした。

トリップが終わってすぐに感じたのは、ものすごい吐き気。

時差で酔ったの！？

まさか！？

異世界トリップ物語には、「時差で酔った」なんて書いてなかったのに！

「うえっ、」

気持ち悪い。

真面目に吐くぞ、私。

正直、立つのも辛い。

と、トリップがこんなに辛かったなんて…。

そりゃ、一日に二回もトリップすれば酔うこともある……のか？？

ガンガン痛む頭と、ぎゅるぎゅる鳴るお腹と、こみ上げてくる吐

き気をこらえながら、辺りをゆっくり見回す。

どうやら、どこかの庭園のようだ。

凄く広い。

もし私が元気だったら、探検していることだろう。

ああ、世界が歪んで見える。

頭痛がする、腹痛がする、何よりも吐き気が…っ。

ふらふらと危なっかしく立っていたそのとき、後ろから声がした。

「何者だ？」

その声と同時にくる臭い。

く、クサッ！！

まるで、何日もお風呂に入らず服や下着の洗濯をしなかったときのような臭いだ。

刺激臭かつ！？

頭痛と腹痛と吐き気と刺激臭に耐えながら、私は声のした方向を見た。

すると、そこには――

「どうした？気分が悪いのか？」

髪はぼさぼさ、服は汚い、汗くさい、アカまみれの男の人が居ました。

……ヒッ。

「ぎーやーあああああああ！不潔うつうつうつ！…っ、う、うえっ、」

駄目、だ…。

もう、吐き気を抑えられない。

私は、お腹の中のを全てはき出してから、気を失った。

001：頭痛と腹痛と吐き気と刺激臭（後書き）

不快に感じた方いらしたらごめんなさい。
でも苦情は受け付けませんよっ！！

002：ココ八何処私八誰

意識が戻った瞬間、鼻にツーンとくる刺激臭。
うおっへ！

何なのこの臭い。

ガバツと起きあがれば、目の前に顔。

「超」汚い。

「ぎ・やあああああ！！ふ・け・つ！！！！」

「……」

「寄るな触るなあっち行けー！」

何。

何何何何。

何事！？

さっきまで感じていた吐き気は消え失せて、すっかりと爽快な気分……だったのが、目の前の男のせいで壊された。

汚い。

不潔。

臭い。

「……」

「離れろって言うてるのよ、この不潔男め！日本語通じないの！？」

あ、そういえばここ日本じゃないんだっただけと言葉は通じているのか？

男は、ゆつくりと私から離れてくれる。

ふう。

やっと、刺激臭から解放された。

私は、一安心したところで、男の様子をじっと観察する。

この男…汚い。

まず、服が臭い。

ボロイ、デザインが古い、色が薄くなっている…など、苦情はいくらでもつけられる。

次に髪が汚れている。

おそらくは茶髪だろう。

髪は長すぎて（男のくせに私よりも髪が長い）気持ち悪い。

更にほこりまみれ。

長すぎる前髪に隠れて見えないけれど、瞳の色は水色らしい。

最後に肌。

アカまみれで、何日もお風呂に入っていないような臭いを身にまとっている。

結論。

…汚い。

次に、部屋の様子を観察。

まず、ゴミが多い。

必要なものが多すぎる。

私が寝ているのはベッドらしいけど…、完全にゴミ置き場だ。

次に、埃が舞っている。

私にアレルギーがあったら、咳とくしゃみで死んでいるでしょうね。

最後に、臭い。

男と同じような刺激臭が、私の鼻に突き刺さる。

「お前。名は？」

……あ、私に聞いているのか。

「そっちから名乗ってください」

「私はダーティⅡアレスト。王宮聖騎士団隊長」

おうきゆうせいきしだん？

何その職業。

でも、隊長さんってことはお偉いさんなのか？？

そうだ、これからは隊長って呼ぼう。

まあとにかく、向こうが名乗ったのなら、こっちも名乗らないとなあ。

「私の名前は爽田絵衣。ええっと、こつちの世界だと……エイⅡサワダってなるのかしら。職業は学生」

「ケイⅡサアカ？」

「エイⅡサワダ」

「エミⅡファワナ？」

「エイⅡサワダ」

…私の滑舌が悪いのだろうか。
そろそろイライラが爆発するぞ。

「お前の名前は言いにくい」

うるせえ好きでこの名前になった訳じゃないやい。

……そうだ！

この名前が呼びにくいなら……私は……。

「それならソーネって呼んでください」

掃除のお姉さんの略語、ソーネ。

憶れてきた名前。

その名前で呼んでもらえるかも！？

「ソーネ。…うむ、ソーネか。良い名だ」
「でしょ？」

ちょっと誇りに思う。

えへん、どうだ。

この「ソーネ」という名前ならば異世界人にも呼びやすく可愛い。
うははは、万々歳ではないかつ。

「ではソーネ。もし行くあてがないのならば、私の家に——」
「あああああああ！！！」

すつつぶ！！！！

これは…、まさか……！！？

“お約束の展開”！？

説明しよう！

この場で言う「お約束の展開」とは、「異世界トリップして最初に出会った人と同居生活を始めてその後いろいろあって恋に落ちる」という展開のことである！！

でも、今回の場合はだいぶ、条件が違う。

まず、たいてい、最初に出会う人というのは「イケメン」だけど、

私が出会った人はただの「不潔男」だ。

イケメン要素のかけらもない。

それに、同居生活と言っても……、こんな汚い家で生活なんかで
きるかあああああつ！

「…何なんだ、いつたい。いきなり大声を出すな」

「おほほほ申し訳ありません」

何とかして、お約束の展開を避けなければ…ッ

「で、私の家に、」

「うあがあああつ！！！！」

「……」

むすつと黙り込む隊長。

「そんなに、私の家に住むのが嫌か」

「はい」

「……」

またも黙り込む隊長。

私は本心を言っただけなのに。

「…だが、野宿をするわけにもいかんだろう。金はあるのか？」

「金はないです。でも、こんな所に住むくらいなら、野宿くらいや
ります」

「……」

またまた黙り込む隊長。

いい加減この反応にも飽きてきたなあ。

「なるべく、掃除はする」

「隊長が掃除をしても、綺麗にならないと思います」

おそらくここはゴミ屋敷…というか、ゴミの城だ。

隊長程度の人間が一日や二日掃除をしたからといって、何とかなるものじゃない。

それならば…。

「私に掃除をさせてください。掃除をさせてくれれば、他の下宿先が見つかるまでは、ここに居ます」

「…いいだろう」

「よろしくお願いします」

どうやら、私は。

このゴミの城で、掃除をする生活することになりそうだ。

「さあ、早速！隊長、風呂に入りましょう！」

「な、」

「私が背中を洗ってあげます！（じゃないと、そのア力は落ちそうにない）」

「い、いいいいい！私は自分で洗える！」

「いえいえ、そんなことおっしゃらずに」

「ほ、放っておいてくれえええ！（一緒に住もうなんて言うんじゃなかった）」

002：ココ八何処私八誰（後書き）

ソーネちゃんは、普通敬語ですが、掃除に関するときには我を忘れるので、誰彼構わずタメ口になります。

はてさて、話は変わりますが、私もついに中学二年生となりました！

これで受験生へと一歩近づいた訳ですが；；

…まあ、楽しければそれでよいっし！！！（？）

取り敢えず、受験生になったら、執筆活動をするのが困難になりますので、（私の母親が怖いのです）今年は、書けるだけ書いていこうと思います^^

よろしく願いますゝ（そして、未だに主人公の描写がされていない件について！………すみません；；）

003…ゴミ屋敷?いいえゴミの城(前書き)

サブタイトル思いつかず。

あらあらうっとうしくなった
↑

003:「ミ屋敷?いいえ」の城

「風呂入った」

「ハイハイ……ってどこが!？」

私が部屋の掃除を（とにかく片っ端からものを捨てていく）しているときに、隊長の声が。

くるっと振り向くと、風呂に入る前と全く変わっていない隊長のお姿が目映った。

……お風呂入ったのか？

体洗ってない、とか？

つつか臭い。

この刺激臭は一体どこから来てるんだ???

などの疑問を胸に秘めて、

「いや、聞こえてる。胸に秘めてない」

「やつだー何言ってるんですか隊長ってばあー!」

盗み聞きなんて、どういう趣味をもっているんだ隊長は。

「いや、ソーネが勝手に喋っているだけで私はたまたま聞いただけだ」

「あははっ、誤魔化さなくてもいいんですよ隊長」

「いやだから、誤魔化してない」

またまたー、往生際が悪いなー。

…って、こんなことしている場合じゃない！

「隊長！とにかく、一緒に風呂場に行きましょう！」

「え、」

「やっぱり私が洗います！この問題は隊長一人では手に負えませんから」

「だが、夜も遅いし…」

「何言ってるんですか、こんな臭いまままで眠れませんか」

「え、え、え、」

戸惑う隊長をぐいぐい押して、風呂場（らしき所）へと連れて行く。

きつ…汚い！

これ、本当にお風呂場？

床が、まるで油をぶちまけたかのようにギツギト。

シャンプー（らしき物体）はカビで覆われているし、リンス（らしき物体）は黒い小さな虫っぽいもので覆われている。

バスタブには汚れがこびりついているし、隊長の抜け落ちた髪の毛が（いや別に隊長がハゲと言っているわけじゃないよ？）お湯に浮かんでいる。

だいたい、お湯自体が汚い。

泥水かっていうくらいに淀んでいるし…。

……私、お風呂に入れそうにないわ。

「隊長、こんな風呂場で何をどう洗ったんですか」

「どうって……、体をこつ、」

「生々しいわ、やめんかつ！」
「……」

黙り込む隊長。

無口だな。

まあそれはいいとして…

「隊長、近くに銭湯はありますか？」

「セントウ？」

「はい。って、この世界に銭湯ってないのか」

「……」

じゃあ…泉？

「この近くに泉はありますか？」

「泉なら、裏の森を奥に行つたところにある」

「水浴びしてきてください」

「だが、風呂ならさっき、」

「あれは風呂じゃない！！！」

私はあれを風呂とは認めない。

あれを認めてしまつたら私の人生は終わる。

だいたい、あれに入つたら、体が綺麗になるところか更に汚くなりそうだ。

虫の死骸とか浮いてそうだし。

私は虫自体は嫌いじゃないけど、死骸はゴミだから嫌いだ。

「行ってくる」

「いつてらっしゃーい」

…さてと。

まずは、この風呂場をどうにかしないとね。

「チッ」

風呂場に、私の舌打ちが響く。

ちくしょー、何なのこの汚れ！

全然落ちないんですけど。

カビキ●ーも何もないから、更に私が不利だ。

化学はこの世界より、地球の方が断然上みたいね。

「ここにある武器は…コレだけ、か」

私は自分の手におさまっているものを見る。

コレ…すなわち、「束子^{タワシ}」だ。

っていうかこれ束子？

なんかちよつと違う気がする。

そりゃそーか、ここって、昔の日本って感じじゃないしね。

どっちかっていうと、ヨーロッパみたいな？

ヨーロッパに束子があるわけ…ないね。

「あつ、そうそう、アレもあつた」

アレとは、あの阿呆^{アホ}に渡された「金の雑巾」である。

結局アレって、役に立つのかしら？

金ぴかに光ってるけど、その意味はあるの？？

ま、とにかく使えるものは使っとくか。

プラス思考に切り替えた私は、金の雑巾で、バスタブのカビをこしこしと洗おうとした。

……だがしかし。

「にはあーっ!？」

私がこんなみつともない叫び声をあげてしまったのも無理はない。だって。

金の雑巾が、動いた。

私の手から、モゾモゾッと逃げる雑巾は、生きているようだ。

ひ。

ひええええええ。

いくら何でも気持ち悪い。

何て面倒な雑巾を渡してくれやがったんだあの阿呆^{リップル}は！

…使えない。

どいつもこいつも。

束子（つばい物体）は手に針（つばい奴）が刺さって使えないし、金の雑巾は逃げる。

……ったく。

マトモに掃除できる道具は何かないの？

「掃除の未来は暗いわ……」

絶望に浸りながらも、風呂掃除を開始する私。

取り敢えず、身近なところから始めよう。

ぱっと見た感じ、一番楽そうなのは……、

「この錆付いた鏡かな」

うん、これでしょ。

鏡の錆はそこまで酷くないし、普通の雑巾でも汚れが落ちそうだし、金の雑巾じゃなくても。

「雑巾はどこかなーっと」

ガサゴソと、屋敷の棚という棚を開けまくる私。

まあ、開けても開けてもゴミしか出てこないのだけれど。この家には、まともな掃除用具がないのかしら。

「おい」

「むひよおおおおお！！！！……って、隊長、何の用ですか」

後ろから急に声かけられる。

び、びっくりした……。

隊長、驚かさないでくださいよ。

そんなことを思っただけで隊長を睨むと、隊長にまじまじと見つめられた。

……鳥肌たつたあ……。

隊長は、前よりは“マシ”な格好をしていた。

髪が長いのはどうしようもないけど、あのアカっぱいものは落ちていいるし、臭くもない。

うん、これなら許す。

だけど、ロン毛は嫌いだから、髪は切って貰わないとな。いつそ坊主にしちゃうとか？

そっちの方がサッパリしてて私的には好きだけど。

そして、サッパリした隊長に思うこと。

「隊長、案外イケメンだったんですね……」

003:ゴミ屋敷?いいえゴミの城(後書き)

そういえば。

今更ですけど。

この小説。

すつつつつつごくだらないです(キラーンッ

恋愛っちゃ恋愛だけど、主人公は興味がないみたいだし
↑

まあとにかく。

長い目で見えてあげてくださいな(笑)

004:私はあれを薬草とは認めない(前書き)

サブタイトル長いっ!!!

…っと、100ptありがとうございます^^

……えっと。

本当に、この話は、読んでても気分がだらだらしてくるだけです

よ?
↑

004：私はあれを薬草とは認めない

隊長が意外にイケメンだと気づいた今日この頃。

私は、未だにお風呂場で未知なるカビと格闘しています。

「うおりゃあああああああっ」

隊長は居ても邪魔なだけなので追い出した（むしろ隊長が居るとカビが増える気がする）

金の雑巾は全く使えないので、とりあえず放っておくことにする。

「おうおうおうおううつっ！！カビだかなんだか知らねえが、このソーネ様に逆らうとはいい度胸だなあ！！」

気分は金取のヤクザだ。

いや……“カビ取のヤクザ”かな。

「うりゃうりゃうりゃうりゃ~~~~っ！！！！」

あの地獄のカビ取が終わった後。

私は、ピカピカになったお風呂に入って、それから夕食を作ろうとしていました。

だがしかし。

「なっ……んじゃこりゃあああ！！」

何ここ。

意味が分からない。

私は隊長に、『キッチンはどこ？』と聞いたはず。
でも、ここは、どこからどう見ても…

「ゴミ置き場にしか見えないんですけどっ！！」

目の前に広がるゴミの群れ。

どこを見ても、何を見ても、ゴミ、ゴミ、ゴミ。

「ゴミしかないとはどういうことだ…」

食材がない。

鍋（らしき物体）はあるが、形が歪んでいて使えそうにない。
第一コンロがない。

この世界にはないらしい。

竈（らしき物体）はあるけど……使い方わかんねえ。
それに埃まみれで使えない。

……駄目じゃん。

っていうか隊長は今まで何を食べていたんだ。

これが私の時代ならカップラーメンを食べていたんだろうな……。
なんて言ったって、三分でできるんだしね。
凄いなカップラーメン。

「たいちよー！」

「…なんだ」

ひょこつと顔を出す隊長。

髪を切って、服装を清潔にしたら完璧なイケメンになるのに。

もったいない。

まあでも、今はそんなことを考えている場合じゃないか。

「何食ってたんですかぁー？」

「……女が食うとか言うな」

隊長つて、意外と女の子に夢を持つちゃうんですね。

「何を召し上がっていたのかしらん？」

「ヤメロ気持チ悪イ」

どっちだよ！

ツツコミたくなっただけど、頑張つてその欲望を抑える私。

…うん、よくぞ抑えた私。

「……思考駄々漏れだ」

ぼそつと隊長が呟いたけど、敢えて無視っ！！

気にしちや駄目だ、うん。

「私は、草を食べていた」

……はっ？？？

く・さ？

三分でできるカップラーメンよりも簡単なモノじゃないか。
っていうか食べられるのだろうか、それ。

レンジでチン？？

いやいや、この世界にレンジはない。

だいたい、あったとしてもレンジでチンして食べられる草なんて
聞いたことがないぞ。

…でもこの世界と私の世界の常識は違うし…。

私が悶々と悩んでいると、隊長からあっけらかんとした答えが返ってきた。

「薬草だ」

「それを先に言ってくださいよ!!」

なんだ、薬草か。

そうだよ、さすがの隊長でも、そこら辺に生えている雑草とかを生で食べてる訳じゃないよね。

「そこに生えている」

隊長がびしつと指さした先には……“トイレ”。

……あああああああつ!!!

「隊長おおおおお、一回病院行ってええええええ!!」

トイレに生えてるのはどう見ても薬草じゃないよつ。

初心者の中でも分かるよ!

むしろ猛毒とかありそうなんですけどつ!

よくそんなものを食べていて生きていたな隊長!

凄いよ貴方の生命力!

「ビョウイン?とは何だ?」

「……」

「だいたい、あそこに生えていたのも立派な薬草だぞ」

「違うつ!!」

「……それに、私だって週に二回は、聖騎士団の寄宿舎で飯を食つ」

……週に二回。

それ以外は、全部“薬草”でまかなっていたんですね。せめて何か買ってきましょうよ。

カップラーメンを買ってこいとは言いませんが、せめて……果物とか……。

「隊長、ここには“食料”ないんですか？」

「あそこに薬草が……」

「しょくりょうないんですか？」

「……」

むすーつと仏頂面で黙り込む隊長。

……うん。

美形だからって調子に乗るなよチクシヨー。

私はまだ隊長を「超美形」とは認めてないからなっ……！！

「たいちよー、聞いてますー？」

「……い」

「え？」

「……ない」

「……」

「ないと言ったらない……！！」

聞こえてるわいっ！

ないってどういうことよ……？

いくら何でも……そんな酷いことが、あつていいの？

食事は全てトイレの薬草。

しかもそのトイレはカビだらけでとても汚い。

……か、考えただけで鳥肌がぁ。

「ソーネ。何か作れ」

材料も何もないのに何を作れと仰るのでしょうか貴方サマは。
というか何様のつもりでしょうか。

せいきしだん？かなんだか知らないけど、このソーネ様をなめる
んじゃないわよっ！！

「隊長。近くにデパー……じゃなくて、えっと……市場はありますか？」

「……どこかには、あるはずだ」

どこかじゃ分らないよ。

だいたい、私はその“場所”を聞いているのであって、存在して
いるのかどうかを聞いている訳じゃないんだよ隊長。

そんなこともわからないのーおーヨチヨチ、いい子でちゅねー。

「……思考駄々漏れだ」

うるさい市場の場所も知らない人が口を挟むなっ！

「とにかく。このままじゃ、何もつくれないので、私買い出しに行
ってきますね！」

「……」

むっすーと黙り込む隊長。

……これは、肯定と受け取っても良いのかしら？
私は、にっこりと笑ってこう言った。

「いってきます!」

004：私はあれを薬草とは認めない（後書き）

えー…お知らせです（？）

ソーネちゃんと隊長の一人称がどちらも「私」なので、
分かりにくいと思います。

そんなときのために、見分け方を伝授しまーす↑

ソーネちゃんは基本敬語です。喋る回数も多いです。

隊長は、たいてい前に「……私は、」みたいなテンテンテン（？）
がつきます。

…まあ。

分かりにくかったら素直に言っちゃってください^^

……頑張つて、訂正いたします…。

005・落ちた瞬間（前書き）

005：落ちた瞬間

「らっしゃいらっしゃい！今日はこいつが安いよー！」

「じょうちゃんぼっちゃんいらっしゃい！大安売りでい、持ってけドロボーっ」

市場へたどり着いた瞬間に、熱気に包まれる私。

ふぉわっ…っ、これが、市場か…。

屋台がずらりと並ぶ道を私は歩く。

おじさんおばさん獣さん（え？）が話しかけてくる中、私は愛想笑いでスルーした。

セールストークに惑わされてはいけない。

駄目よソーネ、きちんとしたものを買うのよ。

「と言つても、こつちの世界に何があるのか、なあって知らないのよねえ」

そうなのだ。

何せ、私はこの世界に来てまだ一日も経っていない。

五時間程度である。

そんな私がこの世界の何を知っていると言うの??

だいたい、私はこの国の名前さえ知らない。

特産物とか美味しい食べ物とか、全く知識がないのだ。

「ま、聞いてみるか」

ということで、私は市場のおじさまおばさま方に訪ねてみることにした。

「すみません、ちょっといいですか？」

「らっしゃい嬢ちゃん！見ない顔だねえ、旅人かい？」

旅人！

さすが異世界、未だにそんな方が存在するとは。

内心驚きつつも、元気に話しかけてきたおじさんに笑顔で首を振る私。

「旅人ではないです。たいちょ…、えつと……ダーティ!! アレストさんの宅の居候です」

私がその言葉を言った瞬間、おじさんの笑顔が固まった。

……ちょ、待て。

隊長、アンタ、このおじさんに何をしたんだ。

「アンタ、あの不潔男の家に住んでいるのかい？」

……あのゴミ屋敷のことを知っているのですね、おじさん。私の笑顔も、おじさんと同じように凍り付く。

ああ、終わった。

「ええ、まあ。これから掃除していくつもりですよ」

「そつ、そうかい！それは助かる！あの屋敷の臭いは、たまったも

んじゃないからなあ。どれだけ離れていても、あの臭いはつきま
つてくるんだよ」

恐るべし、隊長のゴミ屋敷。

うん、掃除をしなければ。

心の中でそつと決心した私であつた。

「で、その居候嬢ちゃんが何の用だい？」

「あ、そうそう。私、この世界……というか、この国へ来たばかり
なんです。だから、特産物とかよく分からなくて……。教えてもらえ
ませんか？」

ザ 上目遣いでおじさんを見る。

すると、何故かおじさんは顔をサアツと青くした。

……ソレハドウイウ反応ナンダヨ。

「特産物……というと……、これじゃねえか？」

ぱつとおじさんが取り出したのは、「じゃがいも」らしき物体。

……どこからどう見てもじゃがいもにしか見えないのですが？

「おじさん、これ、じゃがいもですか？」

おそろおそろ訪ねると、おじさんはおかしな顔をした。

まるで、「じゃがいも」を知らないかのように。

「なんだあ？じゃがいもつつーのは、おいしいもんなのかあ？」

……駄目だ、言葉が通じていない。

頭を抱える私。

そんな私の心情を知ってか知らずか、おじさんは脳天気の説明をしてくれる。

「こいつぁ “ポリック” つつーもんだよ。うめえぞ！」

ぼりつくう？

じゃがいもじゃなくて？

ただの野菜に、そんな洒落た名前が付いているとは。

「その、ポリックとやらには、どんな調味料をかけて食べるのですか？」

すると、おじさんは何故か首をこくりとかしげる。

……ん？その反応はどういう意味だ？？

「チョウミリヨウ？そんなのはかけねーぞ」

うん？

どうやら言語能力が衰えているようだなうん。

それとも、私が狂ったか？？

「はっはーん、今日はエイプリルフルですね！なるほどなるほど、納得ですはい」

「エイプリルヒュール？あんだあそりゃあ」

「……おじさん、調味料、知らないんですか？」

「知らねえなあ。少なくとも俺の家では、んなもんかけねえよ」

……私、この世界で食べていけない気がする。

試しに、通りかかった他の人達にもこの質問をすることにした。

「調味料って知ってますか？」

他人A「うるさいわね、こっちは忙しいのよ！」

他人B「はあ？ ばっかじゃないの、そんなのは上級貴族のアホ共がかかるのよ。わたしらみたいな庶民にそんな贅沢はないね」

他人C「知らん」

他人D「んーっとね、ボクね、知ってるかもしれない…でも知いないっ」

…………… ああ。

終わったな、私の食生活。

…で、でも！

生で食べても美味しい食料だってあるはずだし？

それを探そう！

あの後、私は、生でも美味しい食料を探し求めて市場を彷徨い続けた。

あるときは、味見をしようとして、おばさんにぶん殴られ。

あるときは、泥棒と間違われて、お兄さんに追いかけられ。

またあるときは、何もしていないのに何故か獣人^{けものびと}さんに怒鳴られ。

それでも私はめげなかった……！

何としてでも、隊長に美味しいご飯を食べて貰いたい！

これは掃除婦を目指すモノとしてのプライドである。

例え掃除を専門とする掃除婦を目指していても、炊事洗濯等が出来なければ何の意味もない！

全てを軽くこなし、その中で掃除は一段とスバラシイというのが、理想の掃除婦ではないのだろうか！

話が脱線したが、とにかく、いろいろあつて、私はついに探し当てたのだ！

理想の野菜を！

その野菜の名前は「マカホ」。

いわゆる「きゅうり」である。

…ただし、色は赤だが。

私の知っているきゅうりは、もちろん緑だ。

でも、こちらのきゅうり…否、マカホは色が赤い。

味は一緒である（味見したのさっ！）

「おじさん、このマカホ、十ください！」

「あいよっ！えー…っと、600ユイだよ！」

「……え？」

「いや、だから、600ユイだよっつてんだよ」

ろっぴやくゆい？

何デスカソレハ。

私の頬を、つつーっと冷や汗がたれる。

い、嫌な予感が……す、る。

「600ユイって、何ですか？」

おそろおそろ訪ねると、おじさんは眉をひそめた。

「んなことも知らねえのかよ。600ユイっつーのは、“金”だ、金！金額っつーことよ。さあ、さっさと払いな！」

かね

マネー

私は、お金を、持っていない……。

「どーした、嬢ちゃん。…ま、まさかつ、金持っていないってか？はあ？じゃあ何しにここに来たんだよ。帰れ、帰れ！！」

目の前が暗闇に包まれる。

あ……………。

「…………ネ。…ーネ。…ソーネ、起きろ」

「ん…………」

「…………立つたまま眠るなんて…超人技だ」

この声、どこかで聞いたことがある。
えっと、誰だっけ？
んー、思い出せそうで思い出せない。

「おい、ソーネ。起きてるのか？寝てるのか？…私だ。ダーティだ。起きろ」

だあていい？

…ああそうだ。

私、異世界に来て、隊長と会って、そんで…………市場に行つて、お金が…………。

おかね

「わああっ！！金！！」

「うおっ！？…ソーネ、起きたのか」

「何言ってるんですか隊長！私はさっきから起きてます！！…って、

それより金！600ユイ！」

「起きた瞬間、なんてことを叫ぶんだお前は」

私は辺りを見回す。

あれ？

さっきまで市場に居たはずなのに。

いつの間にか、ヨーロッパ風の建物が並ぶ町に立っている私。

……おつかしいなあ。

ここまでの記憶がない。

おじさんにお金を迫られて、世界が真っ暗になって……で、何故かここに居た。

あまりのショックで、ふらふらと歩いてきたのだろう。
私、情けないなあ。

「隊長、私、カクカクシカジカで……」

「……かくかくしかじかじゃ伝わらん」

「チツ。物語&漫画特有のこの現象は使えなかったか」

「何を言っているのだお前は」

というわけで、私は超高速で隊長に理由を話す。

隊長は熱心に聞いてくれた（いや、ただたんに口を挟めなかっただけかもしれないが）。

「……で、市場から放心状態でここまで歩いてきた訳か」

「はい」

「……お前というやつは……ッ」

「だって！」

だって……私は……、

「だって、隊長に美味しいお料理、食べて貰いたかったんですもの」

掃除婦のプライドがあるからな！

すると、何故か隊長がカチンツと固まる。

あれれと思つて隊長を見上げると（隊長はものすごく背が高い）
顔がタコのように真つ赤だ。

……なんだ？

「隊長、どうかしました？」

「…今から、市場に行くぞ」

「……え、」

「私にも金はある。行くぞ」

た……隊長……っ！！

未来が、未来が輝いて見えますううう！

私は、にっこりと笑つてこう言つた。

「そういう隊長は大好きです！」

「ブフーツー！！」

隊長の鼻からケチャップが……じゃなくて、鼻血が飛び出る。
うぎゃっ。

た、たたた、隊長！？

私、何かしたのか！？

005：落ちた瞬間（後書き）

隊長…。

えつと、補足。

その1、この世界では、牛や豚うしきものも、生で食べる人が多い（らしい）

その2、100ユイとは日本円で100円のことである

その3、隊長は恋に落ちた↑

その4、ソーネの「大好き」は人間という意味である。異性としてという意味ではない。

以上！

006：ソーネの一日（前書き）

今回、ゆるゆるダラダラな物語です。

006：ソーネの一日

私が異世界に来てしまってから、早くも一週間が経った。
時が経つのは早いものだなあ。

そのおかげで、私もすぐにこの場所に慣れることができたようだ。

隊長のお屋敷は、私が一日かけて掃除した部屋が、一時間で元の汚い部屋に戻ってしまうという恐ろしい魔靴だったりする。

「たいちよおーっ！」

朝。

私は隊長を起こしに行く。

ちなみに、私の部屋は既に掃除してあるのだ！
だって、あんなに汚い部屋で眠れないし。
そして、その部屋には隊長を入れさせていない。
隊長が入ると……カビが、湧くからね…。

「ん……、」

「たあいちよー、そういう素敵な寝言は美男子の特権であって、不潔おじさんの特権ではありませんよー」

「……おじさんではない」

「あ、起きた」

というか、不潔ということは否定しないんですね。

既に認めているという訳ですか。

……自覚があるならちゃんと掃除しろよおお！

朝食時間。

私は朝食と、隊長のお弁当をつくる。

「たいちよーっ今日はこの具材を入れてつくったおにぎりです。お弁当、忘れないでくださいよ」

「分かっている」

この世界には米がない。

そんなところで、どうやっておにぎりを作るのかと言うと、パン粉を小さく小さくちぎって米っぽくするのだ。

実際に米ではないが、まあいいだろう。

隊長もうまいと言ってくれているし。

ちなみに、今日の朝食は卵（らしき物体）を使った目玉焼きとパンである。

リビングルームだけは、綺麗な状態を残しておけたので、何とか食事ができるようにはなった。

隊長のせいで、私の部屋とリビングルームとトイレとバスルーム以外はゴミ屋敷のまま。

…私、毎日掃除してるんですけど。

「隊長、遅刻ですよ」

「分かっている」

なら急げよ！！

若干苛々しながらも、私は笑顔を崩さない。

だって、完璧掃除婦ですから。

「おい、声に出てるぞ」

「うるさい隊長」

朝食後。

隊長は、王宮聖騎士団の特訓場へと向かう。

そして、必ずお弁当を忘れていくのだ。

……いやみか？

私は、一つため息をつき、皿洗いをしに台所へと向かった。

昼食前の忙しい時間。

私は皿洗いと洗濯を済ませて、隊長へ弁当を届けに行く。

こんな日が五日ほど続いているので、既に隊舎や特訓場の位置は覚えた。

ちなみに、隊舎には階級の低い聖騎士さんたちが住んでいるらしい。

隊長は、聖騎士団隊長だけあって、国から家をもらっている。まあ、隊長はせっかくももらった家をごみ屋敷にしているのだけれども。

「隊長居ますかあー？」

「おっソーネちゃん！毎日毎日ご苦労なこった」

笑いながら近づいてくる騎士さんその一。
名前も教えてもらったけど、覚えてない。
覚える必要ないしね！

「はい、苦労してます」

「ぎゃははっ、隊長相手にこれだけ言えるソーネちゃんはやっぱ凄えや!」

「ありがとうございます」

「そこは否定してやれよ!」

何故か笑い転げる騎士さんその一をほうっておいて、私は隊長の元へと急いだ。

「たいちょー!」

「…、ソーネ、」

「どーしてまたお弁当忘れたんですかあ!私困ってるんですよ、掃除の時間が少なくなるし…!」

「悪い」

「絶対悪いと思ってないでしょー!!!」

ぎゃーぎゃー騒いでいると、何故か周りに人だかりができていた。隊長は、それにハッと気づくと、私を特訓場の外へと連れ出した。

「隊長、はい、お弁当」

「……ああ」

「何か言うことないんですか?」

「……………感謝している」

駄目だ、お礼の言葉に聞こえない。

でもまあいいか。

私もおなかが減ってるし、屋敷に帰って昼ごはん食べようっと。

「じゃ、さよなら隊長」

「……お前は、ここで食べていけないのか」

「私は、屋敷に昼食をつくってあるので」

「……ここで食べれば良い」

良くないよ。

隊長汗くさいし。

そんな人とお弁当なんて食べたくないよ。

という本音は、私の胸の奥にひっそりと隠して。

「隠せてない、かなりオープンだ」

「うるさい隊長お黙りになられてです」

ぐつと黙る隊長。

私は、屋敷へ帰ろうと、一歩隊長から離れる。

「ソーネ、行くのか？」

「ええまあ」

「……お前に愛情というものは、」

「ありませんね」

「……」

隊長がまた黙る。

…これは、帰っていいよっていう合図なのかな？

それじゃ、帰ろーっと。

「それじゃ、隊長、さようなら」

「……」

「屋敷へ帰ってくるときには、ちゃんと水浴びしてきてくださいね」

「……」

「お弁当、忘れずに持ち帰ってきてくださいよ」

「……」

完全に機嫌をそこねている隊長。

…全く、どれだけお子様なんだか。

私は、一つため息をつく、隊長に向かってこう言った。

「隊長。私、隊長のこと、屋敷で待ってますから」

「……ッ、」

「早く帰ってきて欲しいなー」

「…今から、帰る」

「私、特訓をしっかりとやる隊長が好きです」

「……特訓をやってくる。…待ってる」

「はい！！！！」

こうして私は、隊長が帰ってくるまでの自由な時間を手に入れた。
はたして、私がその時間をどう使ったかと言つと……、

「うおりゃあああああ！！今日こそこの屋敷をピッカピカにしてやるううう！！」

……世の中には、知らなくても良いことがそこらじゅうに転がっている。

006:ソーネの一日(後書き)

ゆるーくダラーくをモットーに執筆しました↑

次回、新キャラ登場なのです！

ふふふふつ、私の手持ちカードが、ソーネと隊長だけな訳ないでしょう。

他にもあれやらこれやら用意してるのですよふふふふ()やmゆるーくダラーくファンタジー設定利用させていただきます^^

007：隊長水毛疑惑（前書き）

今回ちょっと長いです。

あと、後書きにお知らせあるので見てください。

007：隊長水毛疑惑

「は？隊長、今なんと仰いました？」

自分の耳を疑ってしまう。

何故ならば、

「ソーネに会わせたいヤツがいる、と言った」

隊長がこんなことを言うからだ。

会わせたい。

それはつまり、“結婚相手”なのでは。
だってよくあるではないか。

『なあ母さん、』

『あらなあにタケシ』

『俺、母さんに会わせたい人が居るんだ』

『あら、それはどちらさまかしら？』

『俺の……彼女なんだ。結婚を前提に付き合っている』
『……』

みたいな。

この場合のタケシが誰だとかそういう疑問は置いておいて。

隊長が、私に会わせたいと言っている人…それってやっぱり、恋

人だろうな。

結婚を前提に、っていうのは言い過ぎかもしれないけど、付き合い
っていることに間違いはあるまい。

そう確信して頷く私を、不思議そうに見つめる隊長。

「隊長」

「……？」

「隠さなくても良いのです。私は姑などにはなりません」
「……？？？」

あ、まさか、隊長の彼女さんは、隊長と一緒に住んでいる私を憎
んでいるとか！？

それは大変だ。

何としてでも誤解を解かなければ。

……ん？

というか、その恋人さんも一緒に住めばいいのでは……？

「隊長！」

「……なんだ？」

「その方もこの屋敷に住めば良いのではないでしょーか」
「却下！アイツを住まわせて何の得があるんだ！」

何の得って、いろいろあるじゃないか。

一日中いちゃいちゃできますよ。

……もしかして、私が邪魔とか？

「隊長、私……邪魔なら出て行きますから……！」

「行くな」

珍しく即答。

まあ私が居なくなったら掃除する人居ないしね。

あ、でも彼女さんが掃除やってくれるかな？

「その方って家事出来ます？」

「……恐らく無理だろうな」

なるほど。

ではやはり私が掃除婦として頑張るしかないですね。

悲しき運命…。

私をこの世界へ飛ばしたリプルを、一生恨み続けてやる……ッ。

「お、おい、ソーネ？どうした??」

「イイエ何デモアリマセンヨ」

何故か顔を青くする隊長。

ふふふふ、リプルの野郎め、今度会ったら何をしてあげようか。

楽しみですな、再会が。

「とっ、とにかく、今日はそいつを連れてくるから。夕飯、三人分
つくつといてくれ」

「はい！ごちそうを用意しますね！」

「いや、アイツにはごちそうなんて必要ない」

「何を言っているのです、仮にも隊長の、」

婚約者なのに!!

そう言おうとした瞬間、隊長がくるつと身を翻す。

「では、特訓に行ってくる」

「いつてらっしゃい。…あ、ハイ、お弁当！」

「……」

最近は、隊長は弁当の忘れ物をしない（というか私がさせない）。隊長の嫌がらせに気づいたから。

私の自由の時間を減らしているこの“お弁当忘れ”は、完全に嫌がらせでしょう!?

まあ、それはとにかく。

今日は、隊長の婚約者のために、腕をふるってあげようじゃないの。

ケーキ焼いて、肉焼いて…あ、でも、肉ないわ。

市場で買ってこないと。

でも、牛のお肉とか買おうとすると、牛丸ごと買わなくちゃいけなくなるのが嫌だなー。

何故、牛ロース単品とかで売っていないのだろうか。

「とにかく、買い物に行って、その後掃除をしょーっと」

「…ただいま」

「お帰りなさいーい!!! って、隊長、お客様は何処いどこに??」

隊長が特訓から帰ってきたので、慌ただしく出迎えると、何故かそこには隊長一人しかいなかった。

あれ?

婚約者さんはどこ??

「ああ、アイツは、そのうち来るから。気にするな」

「気になりますよう! だって……、」

隊長の婚約者さんですから！

どんな物好きな人が確かめなくては私の気が晴れない。

美人さんだったらどーしょー！

そんな隊長にはもったいない！

いやむしろ極度の不潔さんだったら…私の負担が増えるだけだわ。

「……アイツのことは本当に気にしないでいいから」

「何言ってるんですかぁー！放っておくなんて可哀想です！もっと愛してあげてください！」

「……………あい、す？」

「はい！」

私が元気に返事をする、何故か隊長が首をかしげる。

…はて。

私、何か変なことを言ったかな。

なんとなく不安になったとき、二階から、パリーンツという音がした。

なっ、ななな、何！？

まるで窓ガラスが割れたような音。

いや、もしかしたら本当に割れたのかもしれない。

何で！？

隊長に目を向けると、隊長は何故かげっそりとしていた。

「た、隊長、今の音、何の音でしょう…？」

「……アイツが、来たんだろうな」

「……………へ…？」

隊長の顔が、いつもより更に無表情になっている。

ひええええ、なんか怖いよお。

「行くぞソーネ」

「はい……」

何？何？何が起こったの！？

内心分らないことだらけで焦りまくる私だが、それをみじんにも顔に出さない。

ふっ、これぞ掃除婦の心得第三百三十六条なのですよ。

隊長が、音のした部屋のドアノブを握る。

私が緊張してそれを見守る。

ゆっくりと、扉が開いていく。

開かれてゆく扉の奥には……“男”がおりました。

「……やはり、お前か」

「……え？え？ええええええ！？お前、って、この人が、隊長の紹介したかった人？でっ、ででで、でも、でも、でもっつつっ！」

おとこ！

おとこ！（大事なことなので二度言う）

おとこ！！！！（大事なことなので三度も言う。しつこい）

「よっ、ダーティ！」

男が喋る。

ひええええ、声が低iiiiい。
どこからどう見ても男だ。

でも、この人は…隊長の婚約者…だよな。
ってことは…隊長って……………

ホモおおおおおおお！！！！

「…………あれほど言っただろうが、玄関から入って来いと」
「っははは！そんなみみっちいことで悩んでんのか？んなこと気に
すんなって」

隊長と男の会話。

その会話は親密な関係のようで、胸がどきつと高鳴る。
ひゃあーんっ、隊長が、ほ、ほ、ホモ、だなんてえ！！

「…………お前、あの竜はどこに居る？」
「ん？ああ、置いてきちまった！！ちよっくら行ってくるわあ」
「おっ、おい、おまつ…………！！」

ぎゃあああ、隊長とあの人の禁断の恋愛iiiiい！
めくるめくBL…っ！
ボーイスラブ

うああああっ考えただけでも鼻血があつ。

別に腐女子じゃないけど、腐女子じゃないけどね！！
掃除婦を目指すノーマルな女の子だけどね！

私は、隊長の婚約者さんに目を向ける。

身長は隊長と同じくらい…つまり相当高いということだ。
で、全体的に細い。

そして、清潔…には見えない！！！！

顔には泥がたっぷりついてるし、民族の衣装みたいなものを着ているし、頬には絵の具みたいなものでマークが描いてあるし……。とにかく、まるでターザンみたいな格好なの！

「じゃ、いつてくらあ」

そう言つて、男の人は、窓から飛び降り……。ん？ とびおり？

…ひよあああああ！？

とつ、とととと飛んだ！？

何で？

ここ、二階だよ？

飛べるわけないじゃん！

私があせっていると、窓の外からこんな声が聞こえてきた。

「アアアアー！」

…もしや、本物のターザン？

「隊長、あの人はいったい…？」

「……アイツは、ムノイミズレルと言って、王宮竜騎士団の隊長だ。あれでも、竜を扱う腕はかなりのものだぞ」

「ちなみに、性別は…？」

「…男だが。女に見えるのか、アレが？」

いいえ、見えません。
ということとは。

やはり。

隊長は。

「隊長……、貴方って……ホモ、なんですね」
「……は??」

その後、私の誤解は解けました。

隊長の“紹介したい”というのは、ただ単純に紹介しなかったただけだそうです。

…私ってば、早とちり…。

007：隊長水毛疑惑（後書き）

竜騎士についての説明は後ほど。

このムノイさん初登場のお話は、あと一話くらい続くはずです。

くお知らせく

私の小説を、以前にも読んだことがある！という方は知っているでしょうが、私は、現役中学生です。

なので。

“試験”があります。

……まあ、要は、その試験期間は、執筆できません。

ですので、来週の金曜日は投稿することができないと思われます。ごめんなさい。

試験が終わったら（そして点数が良かったら）執筆活動を再開します。

もし点数が悪かったら……塾行きですうつうつうつうつうつうつうつうつうつうつ……！！！！！！

私ピンチ！

ピンチピンチ！

誰か助けー（）

つと。

まあとにかく。

そういうことなので。

少しの間お待ち下さい。

（また、再来週になっても投稿がされていない場合は、塾行きとすることなので、一ヶ月に一回くらいの更新ペースになるかと……。ご迷惑おかけして申し訳ないです……。塾行きは嫌なので、頑張りた

と思います。応援よろしく願いします↑)

あっと、言い忘れてた!!

200pt感謝感激です!!!!!!!!!!!!!!!!!!

008：あれが友情

私の誤解が解けたあと、隊長に改めて、あのターザンさんを紹介してもらったことになった。

うーん、できれば関わりになりたくない人種なんだけどな…。

「で、ソーネ。こいつが…、」

「俺あむのいゝミズレルつつーんだ！よろしくな！」

「…というわけだ。で、ムノイ。こいつが…、」

「エイゝサワダです。ソーネと呼んでください」

「…というわけだ」

隊長の言葉を完全に遮る私とムノイさん。

おお、なかなか気が合いそうだ。

……それはいいとして。

「ムノイさん」

「何だあ、ソーネさんとやら」

「呼び捨てで結構です。…で、ムノイさん」

私は大きく息を吸って、高らかに宣言した。

「汚い！！！！不潔！サイテー！何この泥！せつかく掃除したのにまた汚れちゃう！風呂に入れ、風呂に！！！！」

猛烈な勢いでまくし立てると、ムノ伊さんが目を丸くした。

隊長ははあとため息をつく。

貴方もですよ、隊長サン。

二人とも汚い！不潔！風呂へ！水浴びへ！

「ッ、はは！こいつぁおもしれーや。ダーティが隠す理由も分かるぜ」

いきなり笑い出すムノ伊さん。

…は？

なんでここで“おもしろい”という単語が出てくるんだ？

しかも隊長が隠す??

何を?????

「……別に隠してなど、」

「隠してるだろー、俺が見せろって言っても見せねーし」

「……お前に見せなくともこれの良さは私が知っている」

「ふーん、妬けるねえー。そこまでして隠す程の良さがこれにあるの？」

これってなに？

隊長が隠してるものってなに？

私の好奇心がうずくううーっ！！

「……お前には一生分かるまい」

「おう！」

ムノ伊さん、おうって何だよおうって。

何の話をしているのかさっぱりだけどムノ伊さんの反応はおかしい気がする。

ということ、反論してみることにした。

「ムノイさん、分かってあげてくださいよー」

ピシッと固まる隊長とムノイさん。

ん？

なんだ、この空気。

言っではいけないことを言ってしまった…のか？？

「……ソーネ、」

「お前…分かって言ってるのか？？」

分かりませんが。

私がふるふると首を振ると、ムノイさんはほつと息を吐いた。
隊長は未だに固まっている。

「たいちよー、起きてますー??」

「……」

無表情のまま口をぽかんと開き固まっている隊長。
起きてる??

心配になったので、コンコンと隊長の額をたたく。

「たあいちよー、起きてくださいー」

「……ッ、あ、え、は、あ……そ、ソーネか……」

「はいソーネです!」

びしッと敬礼すると、隊長がふつと笑った。

おおー、隊長のほほえみ。

……やっぱりこういうのは美少年の特権だと思うようん。

「で、隊長とムノイさん」

「ん??」

「お風呂に、入りましょうか」

ニツコリ笑顔で言うと、何故か二人ともゲッソリとなった。

……いつもこいつも、乙女の笑顔を見てそんな顔をするとは…
許せぬ。

「さーあつとつと入ってくださいよっ！じゃないと夕ご飯ナシです！一人で三人分食べますからね！」

「なあダーティ、いくらあの娘でも、一人で三人分は食えないだろ？」

「……いや、」

「え？」

「…ソーネなら、食べるぞ」

「……」

隊長とムノイさんのつぶやきが聞こえてきたけど、敢えて無視！
どうせ私は大食いですよーっだ。

その分掃除で体力を使ってるからいいんです！！

「なあダーティ」

「……なんだ」

「俺達…さつさと風呂入らねえと、あの娘に晩飯食われちゃうのか？」

「………そういうこと、だろうな」

「……」

「……………言っておくが、ソーネの料理は絶品だ」

むすーつと黙り込むムノイさん。

あらあら、隊長つてば、そんなことを思っていたのね。

まあ、絶品という言葉にあたいする料理をつくってますから、私は。

「なあダーティ」

「……………なんだ」

「風呂……………はいるか」

「……………ああ」

だだだだだつと音をたてながら、二人同時に風呂場へ向かった。

……………あれが友情？

……………友情……………なのだろうか……………。

008：あれが友情（後書き）

ぎ、ぎりぎりセーフ…！？

一発書きですがそこはお許しを！
ててテスト終了でござんす。

ご迷惑おかけしました（いや、結局迷惑かけてないか）
今回お話短くなりましたが、そこは広い心でお許し下さい。

次回でムノイさん出会い編終わります。

009：黒い物体A（前書き）

サブタイトルで物体Aが何か分かった人は凄い。

009：黒い物体A

「あああゝゝゝ！！そりゃないよおおー！！」

「……ソーネ、お前なあ……」

結局、隊長とムノイさんの風呂帰りを待ちきれなかった私は、夕食をほとんど食べてしまった。

だっっておいしそうだったし…。

お腹減ってたし…。

「だ、ダイジョブです！！一人分の夕食は残ってます！」

「一人か……」

「……私が貰う」

「ちょっと待てよダーティ！俺客だぞ！あの夕日に向かって約束しただろう、俺に最高の夕食を食わせると！」

「夕日に約束した覚えはないし今夕日などない。だいたい最高の夕食をソーネがつくってくれているとは言ったが、勝手にお前が押しかけてきただけだろう」

……隊長、そんなに多くしゃべれるんですね……。

既に無口を通り越して滑舌が凄く悪いのかと思ってた…。

滑舌いいじゃん、隊長！

もっと話そうよ！

こみゆにけーしょんぷりーずみー！

にしても困った。

約二人分の夕食を食べてしまった私には少しだが責任がある。
このままでは隊長とムノイさんの激しい争奪戦が始まってしまっ
のではないか。

……ちよつと見たいけど。

…とつとにかく、私はなんとしても止めなければ!!!

「隊長、ムノイさんっ!!」

「何?」

「ジャンケンで決めましょー!」

「……は?」

二人がいつせいに私の方を向いた。

まるで、「ジャンケンってなんだ?」というような顔。

……うん?

まさか、この世界にはジャンケンがない…とか?
試しに、隊長とジャンケンを試してみることにした。

「隊長、」

「……ん?」

「じゃーんけーんぽんっ!」

私はパー。

隊長は……何も出していない。

……これは…やはり、ジャンケンがないのか!?
なんてこったい!!

「ムノイさん、」

「おう?」

「じゃーんけーんぽんっ!」

私はパー。

つられてムノ伊さんも手を出したが……なんと三本指が立っている。

……これは何??

「ムノ伊さん、これ、何ですか?」

「あー……三本指?」

そうですねそのまんまですね。

私は早速、隊長とムノ伊さんにジャンケンの説明をしてあげる。

「ジャンケンというのは、三つのパターンを使って遊ぶんです。まず、これがグー。石です。これはチョキ。ハサミです。これがパー。紙です。石ははさみに勝ち、はさみは紙に勝ち、紙は石に勝つのです」

すると何故か、隊長はいつもの倍不機嫌になり、ムノ伊さんは先ほどより倍馬鹿になった。

「……何故紙が石に勝つのだ。納得いかん」

そこにイチャモン付ける気ですかああー!

さっさとジャンケンやろうぜ!!

「俺、意味わかんなかったー! まあでも、頑張ればいつかは分かるときがくる!」

来ねえよ!

頑張っても分からないと思うよムノ伊さんの場合は! 馬鹿というかなんというか…。

だいたい熱血だよねムノイさん。
正直暑苦しいんだよね。

「……ソーネ、心の方が駄々漏れだ」

「ひつでえー！暑苦しいとかひつでえー！」

「おほほほ何を言っているのかしら隊長にムノイさん」

そんなこんなで、夕食会は終わっていった。

「ムノイさん、こっちです」

「おう！！」

結局、あれからいろいろあつて、ムノイさんは屋敷に泊まることになった。

何故なら、ムノイさんは酒を飲み過ぎたから。

家に帰れない程に飲むなんて……馬鹿ですが、貴方。

隊長はお酒に強いらしく、無表情でごっくごっくと酒を飲み干していた。

ムノイさんはお酒に弱く、二杯ほど飲んで呆気なくダウン。
全く……情けないなあもう。

それで、今はムノイさんを、客室へ案内しているところ。
まあ、案内と言っても、ダウンしているムノイさんを私が背負っているのだけだ。

「ムノイさん、お酒飲み過ぎですよ」
「おう！ー！！」

返事だけは良い。

お酒飲み過ぎとは言っても二杯だけどね！！

「本当に泊まっていくんですか？客室汚いですけど…」

と言ってもこの屋敷に綺麗でピカピカな部屋はないけどなっ！！
せいぜい金の雑巾くらいだよ、この屋敷で光っているものといえ
ば。

「おうー！！」

本当に返事だけですな貴方は。

はあと一つため息をつき、私はよっこらしよとムノ伊さんを背負
い直した。

つたく、男の人ってなんでこんなに重いのだろうか。

ムノ伊さんは細身なのに。

「ここです。ここが、今日ムノ伊さんが泊まっていくな部屋ですよ」
「おうー！！」

ふらふらーっとおぼつかない足取りで歩き始めるムノ伊さん。
だ…大丈夫、ですか？？

ムノ伊さんがベッドにダイブする。

そのままくたーっと思りだしてしまった。

あーらら。

にしても、よくこんな汚いところで眠れるな。

ベッドは音を立てて軋み、毛布には大きな穴が開いていて、床に
はゴミが放り出されている。

…掃除、しないとなー。

そのときだった。

“アレ”が、やってきたのは。

最初におかしいなと思ったのは、カサカサと言う音。

なんだ？

何の音だろう？？

なんとなく嫌な予感がして、私はゆっくりと、音がした方向を見た。

するとそこには……、

黒い物体Aがあつた。

「ヒッ……！！」

喉がごくりと鳴る。

こ、これだけは、どうしても苦手なのだ。

黒い物体A……つまり、ご、ご、ご……ゴキ、ブリ。

まさか、異世界にもこいつが居るなんて。

嘘でしょ。

嘘だと言ってよ神様。

「ご、ごき、ごきゅ、ご、ごっけ、」

焦って上手く言葉にならない。

私が固まっている間にも、ゴキブリはもそもそとゴミの間を動く。

…そうだ。

こんなゴミ屋敷に、ゴキブリが居ないはずがないではないか。

私の馬鹿、どうして気づかなかったんだろう。

これ以上悪いことは起きないはず……！！
…と思った私が甘かった。

悪い事つて続くものだね。

悲しいね。

悲しいね。

なんと、ゴキが、飛んだのだ。

びよんつと。

約一メートルほど。

「のわあああつ！！！！」

も、もう、無理いいい！！

ゴキへの恐怖に耐えられなくなった私は、ついに行動を起こした。
ムノイさんの眠っているベッドへと、“私が”ダイブする。

みししつと軋むベッド。

ぱちつと目を覚ますムノイさん。

そのムノイさんに、しかと抱きつく私。

「ん…っ、おう…??そー、ね…??」

「こっ……、こあい、ですっ…っ」

離れるものか！！

ぎゅつとムノイさんの胴回りに腰を回してしがみつく。

ムノイさんの心臓の音が急にばくばくと激しくなりだした。

「これは…夢、かあ??」

「む、ムノイ、さっ、たす、けて…！！」

涙で視界がにじむ。

ゴキブリは、本当に嫌いなのだ。

何がどうして、あんなものを好きになれるというのだろうか。

ゴキブリなんて…、この世から消えてなくなってしまう方がいいのに…っ。

「ソーネ、？」

「ムノイ、さ…っっ」

そのとき。

ばたんっと、客室の扉が開いた。

「ソーネ！…どうした…っ、っっ！？」

隊長が客室に入ってくる。

そして、目を丸く見開いて固まった。

……え……？

隊長が固まった理由が分からなくて、私は現在状況を確認する。

・ゴキブリが居た

・だからムノイさんに抱きついた

・ちなみにここ、ベッド

……え……っ。

「む、ムノイ…っ、お前、ソーネに何をした………？」

「だ、だー、てい！？ご、誤解だ誤解！俺は何もしてねえぞ！あの太陽に誓って…、」

「…黙れ。何もしてないと言っのなら、ソーネが自らお前のもとへ

行っただけなのかな？」

「そ、そうだ、けど……」

「……そんな訳ないだろう」

「うわあああああ！！誤解誤解誤解！！俺はまだ何もしてねえええ！」

「まだとはどういうことだ。まだ、とは。何かするつもりだったのか。なんて恥な。許さぬ」

「ま、待て、待てダーティ！待てえええ！！！」

……。

009：黒い物体A（後書き）

墓穴を掘っていくムノイさん。

これでムノイさん編終了！！

…にしても、この物語、話がどんどんズレていく。
じゃんけんの話など入れる気はなかったのに…。
裏小話として残しておくつもりだったのに…。
なんで…なんで…。

009・5：事件の被害者達（前書き）

今回はダーティ視点とムノイ視点に分けてあります。

番外編なので、金曜ではなく土曜（つまり今日）更新させていた
だきました。

009・5：事件の被害者達

009 隊長視点

ムノイのヤツめ、酒に弱いくせに飲むなど馬鹿にもほどがある。おかげで、ソーネはムノイに尽きつきりだ。羨ましい。

「……」

ムノイのせいで、私は今風呂掃除中だ。ソーネが、

『私はムノイさんを客室へ連れて行きますから、隊長は風呂掃除していてくださいね！』
と私に押しつけたから。

どれもこれも、ムノイのせいだ。
翌朝になったら、たたき起こして追い出してやる。

「……」

ごっしごっしと風呂を磨いていると、背中から悲鳴が聞こえた。聞き覚えのあるその声に、私の体が反応する。

この声…ソーネの声、か？
あいつが悲鳴をあげるなど考えられない。

だがしかし。

私の頭の中で、とある映像が繰り返された。

ソーネがムノイを客室へと案内する。

そこで、ムノイが欲望に負けてソーネを押し倒し……

……………ムノイ、殺す。

「…待ってるよ、ソーネ!!」

こうして私は、ソーネの待っている客室へと走り出したのである。

009 ムノイ視点

ダーティの家に入り込んで、飯を食った。

と言っても、半分はソーネに食われたけど。

アイツ…あんなちっせえ体のどこに、あれだけの量の飯が入るんだ？

わからねえ。

そして、ダーティがアイツに…惚れている理由もよくわからない。

で、俺は酒を二杯飲んだ。

そこまではいいんだが…そこからの記憶がまるでない。

そして、よく分からないが今、俺は、ソーネに抱きつかれている。

「ん…っ、おう…??そー、ね…???」

「こっ……、こあい、ですっ…っ」

こあい？

どういうことだ？？

っつーか、体が…み、密着、して、る…！

俺の体が燃えるように熱い。

チクシヨー、こんな用事体型のくせに…。

「これは…夢、かあ？？」

「む、ムノイ、さっ、たす、けて…！！」

は？

何から助けると？

むしろ俺は、今のこの状態から助けて欲しい。

…と言いつつも、離れたくないような気もする。

「ソーネ、？」

「ムノイ、さ…っっ」

そのとき、俺は気づいた。

ソーネに瞳に涙がにじんでいることに。

胸が高鳴る。

心臓がバクバクうるせえ。

な…何なんだよこの気分…！？

意味わかんねえ！

そんなとき、扉が乱暴に開けられる音がした。

「ソーネ…！どうした…、っつー！？」

……あ……りゃ？？
だー、てい……？

何故か、ダーティが固まっている。
なんだあ？？

ソーネも同じように固まっているし。
どういうことだ？？

というわけで、俺の状況を改めて確認。

- ・俺は寝てた（らしい）
- ・で、何故かソーネが抱きついてきた
- ・ちなみにここ、ベッド

俺の本能が、一言告げた。

『やばい』と。

「む、ムノイ……っ、お前、ソーネに何をした………？？」

「だ、だー、てい……？ご、誤解だ誤解！俺は何もしてねえぞ！あの太陽に誓って……」

「……黙れ。何もしてないと言っのなら、ソーネが自らお前のもとへ行ったと言っのか？」

「そ、そうだ、けど……」

「……そんな訳ないだろう」

「うわあああああ！！誤解誤解誤解！！俺はまだ何もしてねえええ！」

「まだとはどういうことだ。まだ、とは。何かするつもりだったのか。なんて恥な。許さぬ」

「ま、待て、待てダーティ！待てえええ……！！」

俺……ッ、むしろ被害者なんだよおおおおお……！！

あのととき感じた胸の高鳴り。
あれの正体が分かるのは、もう少し先のこと。

009・5：事件の被害者達（後書き）

えーっとこの番外編は、

- ・お気に入り登録数お礼

- ・ポイント200達成お礼

- ・アクセス増量お礼

等の、私から皆様へのお礼です。

気に入らなかった方はごめんなさい。

ではまた、010：でお会いしましょう

（次回、多分新キャラ登場）

010：シンデレラがつ、（前書き）

サブタイトルから見ても分かる通り、今回の話には、あの娘が登場します。

美しくて綺麗で、そして……？

010:シンデレラがつ、

私が彼女、“シンデレラ”に出会ったのは、異世界に来てから一ヶ月が経った頃だ。

「おっそうっじおっそうっじうっれしっいなー！」

この世界は広い。

だから、大声で歌っても、あまり迷惑にはならない。

…道行くおばさま方が、ときどき冷たい視線でこちらを見つめてくるが。

「ぴっかぴかあーのおっへーやでー、らんらんーっとならならー
ー！」

ちなみに今私は、買い物をし終わって、屋敷へ戻るところ。

最近ムノイさんがよく遊びに来るから、料理をつくる私の腕が鳴るというものです。

隊長のお財布を借りているので、高級な食材もちよこつと入手したりしなかったり。

まあ、例えば昨日の残り物を今日のお弁当に入れても、隊長は喜んでくれるんだけど。

唯一の心残りは、調味料が全くない、ということ。

素材の味を生かさなければならぬのだ。

これは、相当難易度の高いことである。

素材の味というのは、聞こえは良い。

だが、元の世界で濃い味の料理に慣れてしまった私の舌が、何か物足りないと呼ぶのだ。

ああ…っカレーライスが恋しい…ラーメンが恋しい…肉が…魚が…あの味が恋しい…っ。

じゅるりとよだれが垂れる。

うおっといけない！

麗しき乙女がよだれを垂らすなんて…！

急いでごしごしと服の袖でぬぐい、ほっと一息ついた、そのときだった。

女性の“悲鳴”が聞こえてきたのは。

「キャアアアアアアア」

聞こえる聞こえる、か弱い乙女の、叫ぶ声が。

聞こえる聞こえる、か弱い乙女の、私を呼ぶ声が。

いざ行こう、それゆけ僕らの、ソーネちゃん！！

「とおっ」

何が起こったのかなんて知らないけれど、今はとにかく、声のした方に向かってみよう。

それでどうするかは、そこに着いてから考えよう。

というように、安易な考えで私は、悲鳴のした方向へと駆けて行ったのだった。

どこだどこだー!?

スカートが翻るのも気にせず、走り回る私。

だが、悲鳴を上げた主の姿が、どこにも見当たらない。

…あつれー?

おかしいなー、このあたりで聞こえた気がしたんだけど…。
そのとき、またも甲高い悲鳴が聞こえた。

「イヤアアアアア! やめてえええええええ!」

…ッ、あつちか!!

方向転換して、走り出す私。

その私の目に飛び込んだきたのは、とある少女二人だった。

…うお?

どうしたんだ、この娘達は。

「シンデレラ、おやめなさい!」

「駄目よっ、やめてえ!」

な、なんだあ??

私が凝視していると、さすがに視線に気づいたのか、少女の一人が振り向いた。

やけに細い娘だ。

もう一人の娘は、反対に、ぼっちゃりとした少女だ。

にしても、さっき聞こえた、「シンデレラ」っていうのは何?
私の聞き間違い?

「あ、あのお…」

「何おっ、この大変なときに!」

「ひよえ…!?!? す、すいません…! って、そうじゃなくて、えと、何

を、していらっしやられる、んですか？」

敬語もあやふやになりつつ喋ると、少女達は一斉に眉をひそめた。
な、ナイスタイミング……？

息ぴったりの行動に目が点になっている私に、少女達はまくしたてた。

「シンデレラが！」

「あの子が、あの子が！」

二人同時に喋っているので訳が分からない。
耳が、ガンガンする……っ。

結局この人達は何が言いたいんだろうか？

「で、シンデレラがどうかしたんですか！？」

「「そうなのよお……！」」

……こついうところだけはハモるんですね、お二人さん。

「あの子が、とんでもないことをしでかしたのよ！」

「全く、いつもこれなのよ」

「ごめんなさい、全く状況が分かりません。

きちんと説明するということができないのかなあ。

とところどころ会話に出てくる、『シンデレラ』という単語。

それは、元の世界ではとても有名なおとぎ話で。

女の子なら、誰もが一度は夢見る物語で。

そして、そのシンデレラが、何かをしでかしたらしい。

シンデレラの原作通りなら、この少女達はもしや、お姉様達？
まさか、シンデレラへの悪戯が失敗したので、嘆いている…とか？
…自業自得だと思うけどな！。

「お姉様方、結局これはどういう自体に陥っているんですか？」
「あの娘が…！」

そのとき、“頭上から”物音が聞こえた。
その音は、路地の端から端まで木霊している。
な……っ、何！？

驚いて声も出ないって、本当にあるんだなあ。
妙に落ち着きながらも私は、今のこの状況に、とてもとても驚いていた。

あり得ない…あり得ないあり得ない…こんなこと、絶対にあり得ていいはずがない。

私の頭上の上には……、パンツが丸見えになるのもまるで気にせず、ドレスのまま、“壁によじ登る”少女が居た。

「「シンデレラあー、降りて来なさい！！！」」
「……ッええ！？あ、あの子が、シンデレラあ？」

銀髪のツインテールが風に煽られる。

お姉様方の叫びに気づいて、その少女が私達の居る方…つまり、下を振り向いた。

ひよわあああつ、怖い、高い、落ちるよ貴方！！

その少女と私の目が合う。
胸がどきつと高鳴った。

私を見据える、エメラルドグリーンの瞳に、透けるような白い肌。華奢な手と足を壁に張り付け、ゆっくりと壁をよじ登っていくその少女の姿に。

不覚ながら、見とれてしまった。

私は確信する。

この子が、シンデレラだ。

間違いない。

この美しい容姿は、シンデレラ以外の何者でもないはずだ。

ああ。

あの美しさを私に分けて欲しい。

あんな子が街を歩いたら、男の人は見惚れ、女の方はきゅっと唇を噛むことだろう。

羨ましい。

羨ましすぎる。

きっと、素敵な子だろう。

か弱くて優しくて善良で、そして綺麗な少女…。

ところが、そんな幻想は、一瞬で打ち破られる。

「あああーっ！お姉様達いー！こっちですよー、ガハハハッ！」

頭上から響く高らかな笑い声。

豪快なアルトボイスの持ち主は、そう、シンデレラ。

……ヤケ二声ガ図太クアリマセンカ？

010:シンデレラがつ、(後書き)

ちなみにシンデレラの口癖は「ガハハハッ!」です。

多分ムノイと気が合うはず。

何気に私はこの子が好きです／＼／

011: 貧しくて悪かったね(前書き)

駄目だサブタイトル爆発寸前…っ。

ふ…ふ・ふ・ふふふふ()

011：貧しくて悪かったね

「あああーっ！お姉様達いー！こっちですよー、ガハハハッ！」

豪快に笑うその少女は、その見た目からは想像もできないような
図太い声だった。

あ…あり得ない…女の子の憧れのシンデレラが…っ、あんな、あ
んな……。

「ん？お姉様達の隣にいるヤツ誰だあ？？」

…っ、私のことか。

お姉様方も一斉にこちらを向く。

「あら、」

「そういえば、」

「「どちら様かしら？？」」

あんだ達……ッ。

若干いらつきながらも、私は笑みを浮かべてこう言った。

「私は、エイ〓サワダ！ソーネと呼んでくださいー！」

「ふえい〓ララア？」

「違うわよ、レイ〓サララよ」

「メリ〓ワラカだろ！」

違います。

そして最後の方は人文字も合っていないません。
というか、ソーネと呼べと言っているのに。

何故あんな達は毎回、私の名前を間違えるのだ。

どうせなら呼ぶなよ。

「ソーネと呼んで、って言うてるでしょーが!」

「「よろしくお願いしますわ、ソーネさん」

「よろしくなっソーネ!」

一人馴れ馴れしいです。

そして、あのシンデレラちゃんは今も壁にべたーっと張り付いています。

いいのかアレ。

駄目だろ。

思いつきりパンツ見えてるし。

せめて恥じらいを持ってくださいお嬢さん。

何の恥じらいもなくぱんつー丸見えて壁に張り付くシンデレラ。

……乙女の夢が碎け散ります。

「よ……よろ、しく……?」

これが、私とシンデレラの出会いだった。

あの後、お姉様方は用事を思いだしたらしく帰って行った。
結局名前も聞けずじまい。

でも、シンデレラとは喋ることができそうだ。

「ちよっ、シンデレラ…ちや、ん、降りて来れば？」

「あー、分かった分かった。今行くぞー」

よ、よかったー…。

正直、見てるこっちがハラハラしたし。

と、考えた私が馬鹿でした。

「ッ!？」

「とおーっ」

今までべったりとくっついていた壁から手足を“放す”シンデレラ。

そう、彼女は、壁から飛び降りた…というか、落下したのだ。
私が声をあげる暇もない程の速さで。
効果音さえしない。

シンデレラのスカートが翻る。

そして、ずでんつと音を立てて、シンデレラが地面に“着地”した。

う…嘘だあああああ!!

そして、沈黙は一瞬で終わる。

「ぷっはー!! やっぱしジャンプは気持ちいいなー!」

「ジャンプの域を超えていると思われるが!!」

ようやく私の反応が正常に戻る。

シンデレラは、目を丸くしてから、豪快に笑った。

「ガハハハッ！ソーネ、お前つておもしれえな！」

「貴方は相当危険だね！」

「おう！」

おうつて、認めちゃ駄目だろ！

まあ確かに危険だけど！

「あたしは、アッシズ＝レイシャンジ。シンデレラって呼び捨てでいいよ」

「よろしくお願いしますシンデレラ」

「ガハハハッ！！もっとうち解けようぜ！」

「努力はするよ。努力は」

にしても、レイシャンジつて、お金持ちっぽい名前だなー。

その割には、服装が地味だけど。

シンデレラは、黒くて古いワンピースに、薄汚れた白いエプロンを付けている。

格好だけは、さすがシンデレラという感じだ。

中身は豪快すぎてついていけないけれど。

ちなみに私かというと、無地でシンプルな白いワンピース。スカート丈は膝上。

最近、ショートだった髪がミディアムまで伸びてきたというのが悩みである。

清潔第一の私にとってこれはとても大きな問題なのだ。

「ねえ、シンデレラって、何歳？」

「あたしか？あたしは、十四歳だぞ」

私より四つ年下か。

どおりで若々しい訳だ。

…胸だけは私と同じくらいあるけれど。

こっこれは別に、私が貧乳だということではないと思う！

シンデレラが年の割に胸がでかいだけだ！

私の胸が小さいというわけではない！

「シンデレラは…お姉様方に、いじめられていたりしないの？」

「ん？そんなわけねーだろ？あたしがいじめられてるように見えるか？」

「見える訳ない」

「だろだろー、ガハハハハッ！」

だよね…。

となると、ここでは、私の知っているシンデレラのお話通りに事が進むわけではないらしい。

そりゃそうだよねー、豪快シンデレラが、目出度く王子様と結婚なんてできるはずないよねー。

まあ、外見は綺麗だから、王子様がころつと騙されちゃうかもしれないけどさ。

でも、人間は清潔第一だから！！

一に清潔二に清潔、三四がなくて五に中身！

そつえば、シンデレラって、いつも掃除してたよね。

ということは、この子も掃除好きかな？？

「シンデレラって、掃除好き？」

「好き！…っつーか、人の役に立つことが好きなんだよ、あたし」

てへへっと少し恥じらいながら笑う少女は、とてもとても美しかった。

ああ。

これで中身が大人しくて、豪快じゃなくて、笑い方がガサツじゃなかったらもっと素敵なのに…。

「シンデレラ、貴方って…、」

「ん??」

「相当、損をしているわね」

「何だそりゃ〜?」

どうせなら、その美貌私に半分わけなさい。
あとその胸も私に三分の二ちょうだい。

011：貧しくて悪かったね（後書き）

文章力も破壊寸前…っ

下書きがもはや意味なし。

ものすごく脱線しまくってここまでたどり着いた…。

大抵、いつも下書きは1000文字くらいで終わるのですが…。

本書きでは、毎回毎回2000文字超えます↑

そして迫ってくる期末試験！

アアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！

012：居たんですね（前書き）

すいません……

テスト期間中でしたので、執筆を見送りにしました。
再開いたします（キリッ

012：居たんですね

「ここが、シンデレラの家？」

「ああ、まあな」

曖昧な返事に、私は苦笑いを浮かべる。
そう悩むことじゃないのに。

「広いねー…」

「ソーネの家はどこだ？」

「えっとねー、」

今私は、シンデレラの家に居ます。
話しているうちに、ガールズトークに華が咲き、お茶でもしながら話そうということになった訳で。

「あそこあそこ」

「あそこじゃ分からないよ、ガハハハッ！」

「えっと…、あの、隊長の家に居候してるんだよ」

「たいちよー？何だそりゃ」

かくつと首をかしげるシンデレラ。

隊長の説明、かあ。

一言で済むと言えば済むんだけど…。

「不潔な人」

「ああ、あの人ね」

これで伝わるのよねー、隊長の説明って。

「王宮聖騎士団の隊長さんなんだって。だから私は、隊長って呼んでる」

「ほーん…。じゃ、あたしも隊長って呼ばせてもらおうと」

がははっと豪快に笑うシンデレラは、内面と外面がやはり一致しない。

うー、こういう外見なら、中身ももっと清楚で可憐なお嬢様タイプの方が…。

でも、私はそういう子はちょっと苦手である。

「シンデレラのお母さんってさ、」

「継母だぜー」

がはは、と軽く笑い飛ばすシンデレラ。
さ、さすが、ポジティブシンキング…。

これでは継母様もイジメがいなさそうだ。

こっちの世界のシンデレラは、相当強い（いろんな意味で）。
うー、これじゃあ、魔法使いさんの出番はないかもなー。

…あ、そうだ。

シンデレラといえば……

「ねえシンデレラ、王子様って居るの？」

ここが重要だと思う。

隊長は王宮に勤めているのだから、居るのだと思うけれど。

もし、王子様と結婚できたら、玉の輿よねー。

…いや別に、王子様と結婚するつもりなんてこれっぽっちもないけれどね。

「居るぞー」

「へー。で、シンデレラはその王子様が好きなんだー」

「何言ってるんだ？あたしは、嫌いだ」

「……」

シンデレラが王子様嫌い、って。

そんな訳あるかい。

というかあっちゃダメ、絶対！

「王子ってどんな人？」

「んー、よく知らん」

「…よく知らないのに嫌いなの？」

「おう！」

…王子が哀れだ。

で、でも、もしかしたら、そのうち、王子に可能性を感じ出すかもしれないしね！

今は辛抱ですよ王子様さん！

心の中で見ず知らずの王子様にエールを送りながら私は、シンデレラに向けて曖昧な笑みを浮かべていた。

「確か、王子は二人いたと言ってたぞ」

「ふたり？」

「そーそー。兄弟だってさ。お姉様達が言ってた。兄貴の方がなん

「つか、こう、明るい王子で、弟の方が、滅多に表に出てこないくらい王子だったって」

ふん…。

暗い王子、ねえ。

明るい王子っていうのは、そのまんまでつまらないけれど、暗い王子というのは好奇心をくすぐる。

まあ、人を見かけで判断してはいけないけどね。

平和な午後。

ところが、そんな時間は、すぐに壊される。

「失礼するぜ」

っ、は！？

いきなり、玄関の扉が開いた。

ただだ、誰ですかあつ！？

凄く驚いている私とは対照的に、シンデレラは平然としている。

それどころか、顔を輝かせているようだ。

「来た来た！そーだ、ソーネにも紹介してやるよ！着いて来いよ！」

「え？っ、うん…？？」

何を紹介してくれると言っただろうか。

頭の中が疑問で埋まりそう…。

突然の訪問者は、一体誰…！？

ズンズンと玄関へと向かうシンデレラ。

その後をくつついていく私。

だんだん、扉を開けた人物が見えてきた。

どうやら二人組のようだ。

な、なんか凄く怪しい気が…。

そのとき、シンデレラがぴよこぴよこつと手を振りまわした。

「おおーっ、ムノイさあーんっ、ちわー!」

ちょ、レディがちわとか言っなよ。

…っ、あれ?

どこかで聞いたことあるような名前が…、

「おお、シンデレラ!いよっ!」

うん?

どこかで聞いたことあるような声…。

というかこれは。

「む、ムノイさん!？」

「ん?おつソーネじゃん!」

「おお、ソーネとムノイさんは知り合いだったのか!」

ええええっ?

何でここに!?

って、こっちの人がムノイさん、だとしたら…。

「……ソーネ、何故ここに居る」
「ヒッ」

隊長のどす黒い声。

……居タノデスネ、隊長サン。

012：居たんですね（後書き）

ただいまスランプ中…。

どうした私…。

シンデレラの話ってなんだか書きにくい…。

隊長の登場が久しぶりのようなそうでないような

王子云々の話については？の方で書くつもりです。

兄貴の方は？で登場予定。

というかそろそろ？のキリをつけなければ。

予定では二十話くらい？で終わりたいです

013：おじさん、がきんちょ（前書き）

筆が進んできたアアアアア！！！！

それはいいけど、いっこうに話が進まないのは気のせいでしょうか。

013：おじさん、がきんちょ

「で、何故隊長がここに？」

「……それはこっちが聞きたい」

無言でにらみ合う私と隊長。

「ムノイさんっ、入って入って！」

「おー、シンデレラ、茶ってあるかー？」

「あるある、飲む？」

「ああ、この俺ののが燃える太陽のようにカラカラだからなっ、
ワハハハ」

「ガハハハッ！」

豪快に笑い合うシンデレラとムノイさん。

異様な光景が、そこに広がっていた。

「……ソーネ、お前は屋敷で掃除していれば良いのだ」

「だからですね、隊長。私はただ、買い出しに行こうとしただけで、
」

「……一週間外出禁止」

「何ですか！せっかくお友達もできたのに！私何も悪いことして
ませんよー！」

「……この町にも悪人は居る。変な奴に捕まったらどうするんだ」

「捕まりませんよ私なんか！こんなのに目をつけるような人は相当馬鹿ですよ！」

「……………」

ここは、シンデレラの家のお庭。

そりゃもう、広いのなのって！

お庭の中に、お茶会用の椅子や机もあるんだから、驚きよ。シンデレラは、ろくに使っていないようだけどね。

「なあなあソーネ、その人がたいちよーさんかあ？」

「そうだよ、シンデレラ」

「ふーん。よろしくつ、たいちよーさん！」

綺麗な顔で豪快に笑うシンデレラ。

隊長はニコリともしずに、会釈をした。
態度悪いなあ、もう。

「ダーティ、外出くらい許してやればいいだろ？」

む、ムノイさん…っ…！

なんて素敵なお言葉！

今、貴方が輝いて見えます…っ。

私がムノイさんを見つめると、ムノイさんはぼつと顔を赤くして、目をそらした。

それとは対照的に、隊長がムノイさんを睨んでいる。

シンデレラは一人がははつと豪快に笑っていて。

何だこりゃ。

「そっいえば、シンデレラとムノイさんってどういう関係？」

「あたしとムノイさん？」

「そうそう」

恋人？

…にしては、ちょっと…ねえ？

「んーっ、一言で言えば、師弟関係？」

「そうだなっ、俺とシンデレラは、師匠と弟子の関係だ」

師弟関係？

何の？

というか何で？

ムノイさんはシンデレラに何を教えていると言っんだ？

私がよくばど怪訝な顔をしていたのだろう。

隊長が、渋々というふうの説明してくれた。

「……以前言っただろうが、ムノイは竜騎士だ。…今では滅多に見かけないがな。……竜騎士というのは、竜を操るからに、炎のハートを持たなければいけないらしい」

ところどころに間を挟んで喋り出す隊長。

最後に、迷信だがな、と付け加えた。

ふーん。

それなら、ムノイさんは竜騎士にピッタリなんだ。

炎のハートっていうか、ただたんに暑苦しいだけだと思うけど。

「ソーネ、ただ漏れだぞっ！俺の燃えるガラスのハートが傷ついた！」

「ムノイさんの場合、ガラスのハートっていうよりは、鉄筋のハートっていう感じですよね」

「うわあーっソーネに笑顔でひでえこと言われたぞっ、ダーティ、お前責任とりやがれ！」

「……ムリだな」

「コイツら二人そろってひっでー!!」

で、話に戻るが、と隊長は前置きをする。

「シンデレラは、竜騎士を目指しているそうだ」

「えー?」

「へっへーん、そうなんだ、あたし、竜騎士になりたいんだよ、ガハハッ!!」

女の人でもなれるものなの…?

……いや、シンデレラなら大丈夫か。

一瞬の考えを一瞬で取り払う私。

「……で、ムノイがシンデレラに“炎のハートとは何か”ということとを教えている訳だ。…ちなみに、私は付き添いだ」

なるほど。

それなら納得。

シンデレラがこんな風になったのも、ムノイさんのせいってことだよな。

まったく、女の子になんてことを…。

「ところで、竜騎士ってどんなことするんですか?」

「んー、基本暇だな!」

カラカラッと笑うムノイさん。

こ…これでいいのか、竜騎士諸君！

「まあいつかは、この俺のみなぎるような戦意に火がつくほどのでつけー戦争が起きるってもんよ！それまで俺らは待機してんだ」

「な…なるほど」

ムノイさんのみなぎるような戦意に火がつくほどの大きな戦争が起こらないように祈っています。

「ところでソーネ、ソーネとたいちょーさんは付き合ってたのか？ガハハハッ！」

シンデレラがもののついでのように聞いてくる。

すると、隊長とムノイさんが一斉にお茶を吹き出した。

……何故ムノイさんまで？

隊長は顔を真っ赤にさせて、視線を泳がせていて。

ムノイさんは何故か体が震えていて。

そして私は首をひねっていた。

「違うよー、そんな訳ないでしょ」

私があっさりと否定すると、隊長はがつくりと肩を落とし、ムノイさんはガッツポーズ。

…そのガッツポーズに意味はあるのか？

相変わらずよく分からない熱血人だな、この人は。

「そうかー？でもいい感じの雰囲気じゃねえか、ガハハハッ」

悪戯っ子のようにこちらを見つめてくるシンデレラ。

どこがいい雰囲気なのだ、どこが。

それはもう少しよく見てから言っしてほしいものだ。

「何言ってるのよ、シンデレラ。私は隊長みたいなおじさんはタイプじゃないし、隊長も私みたいながきんちよ、タイプじゃないよ。ですよ、隊長」

そう言って隊長の方へと視線を合わせると、何故か隊長が白い灰になっていた。

…とういのは言い過ぎにしても、燃え尽きていたというのは正しいだろう。

ムノイさんはわはははと笑っているし。

……うむ??

013：おじさん、がきんちょ（後書き）

スランプから微妙に脱出したような気分の恋夢です！
てーすーとーちゃらりーちゃらりらりー……らー……
！。

014：名前を呼んで（前書き）

そーしーてー、またスーラーンーパー♪

（そもそも私のような素人活字屋が、スランプなどという言葉を
使っているのかという問題）

014：名前を呼んで

隊長が燃え尽きてから数分後、私たちは楽しく談笑していた。未だに何故燃え尽きたのか、理由は不明だけど。

「それで、ソーネは、掃除婦になるのが夢なのか？燃えてるな！」

こう言ったのはムノイさん。

いやいや、むしろ貴方が燃えていますよね。

そして隊長は燃え尽きていますよね。

「ソーネらしいなっ、ガハハハッ！」

こう言ったのはもちろんシンデレラ。

豪快すぎる笑い声が響く。

うー、見た目はこんなに可憐なのに……！！

もったいない！

「……」

こう言った……というか、こう黙ったのは当たり前だけど隊長。うん、そろそろこの反応にも傷つかなくなってきた。

「掃除婦って素晴らしいですね！だって、」

と、熱弁をし始めたのは、当然ながら私、ソーネこと爽田絵衣。

私の話を、ムノイさんはしっかりと聞いていて、いちいち『うお
おっすげえっ燃えてるんだな！』と突っ込んでくる。

シンデレラも、きちんと聞いていて、『ガハハッ！』と笑って
くる。

隊長は、聞いているように見せかけて聞いていない。

みんなの性格がだんだん分かってきたぞ。

…なんてタチの悪い奴らなんだ…！！

「さて、そろそろ帰りますか、隊長」

「……ああ」

「俺も帰るぜっ！あの燃えるような夕日も暮れかけてきた頃だしな
っ」

「ガハハッ！！ムノイさんもたいちょーさんも、元気になっ！ソ
ーネは、また遊びに来いよっ」

「うん、また来るね、シンデレラ」

「……駄目だ」

隊長の目が暗く輝く。

うるせえやい。

何があでもシンデレラと遊ぶからいいけどねっ。

「じゃあねーシンデレラー」

「おうつまたな！」

「うん！」

こうして私は、シンデレラの家を出て、ムノイさんとも別れ、隊
長と二人で、家まで歩くことになった。

「たいちよー、」

「……」

「たいちよー？」

帰り道、いつにも増して無口な隊長。

うー、私、何か気に障るようなことしたかな。
隊長の影法師を見ながら歩く。

なんか……寂しい、ような気がする……。

「隊長、何か返事してくださいよー」

「……」

「たあいちよー」

そのとき、ぴたりと隊長の足が止まった。
それに合わせて私の足も止まる。

およ？

何だあ？？

「…何故、ソーネは、」

「え？」

「私のことを隊長と呼ぶのだ」

……はい？

恐らく私は今目が点になっているだろう。
何故、と問われても。

「そりゃあ、」

「……」

「隊長が隊長だからですよ」

眉間に皺をよせる隊長。

な、なんか怒っていらっしやるような…？

気のせい、でしょうか。

「…何故、ムノイのことを名前で呼ぶのだ」

「……そりゃあ、ムノイさんまで隊長と呼んだら、隊長と間違えるじゃないですか」

「……」

ややこしい。

そう感じたのは、私だけではないようだ。

隊長も怪訝な顔をしている。

…なんだか、こういうときの隊長って…、

「隊長、かわいいですね」

「……はっ、？」

「なんだか、かわいい」

ぽかんとする隊長。

じっと見つめる私。

隊長の顔が、徐々に赤くなってくる。

「……ソーネ、あの、な、私のことも、名前で呼べばいいのだぞ」

「何ですか？」

「何で、って…、」

何故か隊長が焦り出す。

何をしているんだ、一体…。

道ばたの石を蹴ったり、いきなり走り出したり…。
挙動不審ってこういうことを言うのか……。

私がそんなことを考えていた矢先、隊長がぴたりと動きを止めた。
そしてぎこちなく私の方を向く。
な…なんだろう…？

「…私が、呼んでほしいからだ」

……へ???

私ガ呼ンデホシイカラ??
それって一体どういうこと?
頭の中がはてなマークで埋まる。
む、難しすぎて私にはサッパリ…。

「おい、ソーネ?聞いているのか、ソーネ?」

「…す、」

「…なんだ?」

「…ですって言っているんです」

「…聞こえん。もう一度、」

「嫌ですって言っているんですよ!」

隊長が、ごちーんっと固まる。

私、きつと顔が真っ赤。

うつ、恥ずかしい。

だって、隊長が「呼んでほしい」ってことは…。

それってつまり…。

隊長も、私のことを本名で呼ぶってことなのだ。

それだけは嫌だ。

だって、隊長は未だに私の名前をきちんと覚えていないのだ。
いくら私だって、親から貰った大切な名前を、「フェイ」だとか
「レイ」だとか「エリ」だとかに変えられたくないし。

「つて、隊長？道の真ん中で寝てないで、早く家に帰りますよー」

「……」

「たいちよー…」

全く。

隊長もだらしない人だな。

014：名前を呼んで（後書き）

次回、また新キャラ登場です。

ペース速いと言わないでください…！！

このペースで出していけないと、？に間に合わないんです…っ
？からは登場人物紹介入れます。

015：いかにも僕は、（前書き）

んー、今回から「ゆるーりだらーり」の世界観が若干変わるかも…。

恋愛フラグは立つか…立たないか…。

それは私だけが知っていー（ー）

015：いかにも僕は、

あの日、あの道を通らなければ。

そんなことを今更考えてもしかたがないけれど、やはり、どうしても、考えてしまうのだ。

だって、もし、あの日あのとき、あの道を通らなかったら。

私は、こんな面倒くさいことに巻き込まれなかったのだから。

「ソーネ、ちょっといいか？」

「何ですか、隊長？」

いつもと同じ朝。

さあ、教はどこを掃除しようか。

私がそんなことを考えていると、隊長が声をかけてきた。

「……実は……暫く、屋敷に帰れそうにないんだ」

「了解しました！」

反射的に答える。

隊長は少し驚きつつ、私を見つめた。

「……なんだ？私がいなくなることがそんなにうれしいのか……？」
「はい！」

「……」

隊長が屋敷の中にいると、掃除が進まないのだ。それどころか、ゴミが隊長の周りからわき出ているような気がする。

「というわけで、いつてらっしやいです、隊長」

「……ソーネ。私が帰ってくるまでは、屋敷から出るなよ」
「何ですか？」

いいじゃないか。

食材を調達に行かなければならないし、シンデレラの家にも遊びに行きたい。

隊長がいると、シンデレラの家にいけないのだ。

少しは自由というものが欲しいのに……！

「……いいか？今から私は、重要な任務に取りかかるため、屋敷に帰れそうにないんだ。……そして、この屋敷の近くの森は、危険なんだ。……今までは私がお前を守ってやれたが、今度は無理だ。……いいか？家から出るなよ、分かったな？」

……危険、ねえ……。

そんなこと言われたら、気になる、よなあ……。

ちらつと隊長を見る。

いつも無表情の隊長が、珍しく厳つい表情だ。

……気になる。

でも怖い。

でも好奇心がうずく。

でもやっぱり怖い。

でも……、

「……では行ってくる。くれぐれも、家から出るなよ」
「はい。了解しましたー」

でも、やっぱり、…行きたい。

「さて」

隊長も居なくなったことだし……、森の探検にでも出かける
とするか。

近くの鏡に映る私の顔。

その顔は、もうすがすがしい程にニヤリとほくそ笑んでいた。

危険な森。

それは真っ暗で、光が一つもない場所。

…だと思っていた。

「…どこが危ないのよ、この森の」

木漏れ日から差し込む光。

暖かな気温。

動物たちの幸せそうな鳴き声。

小鳥のさえずり。

川のせせらぎ。

…ここを危険だとは到底思えないのですが。

「隊長はちよつと…いや、かなり過保護だよな―」

そんなことを思いながら、草の茂った道をのんびりと歩く私。
平和だ―。

可愛い花も咲いてるし、危ないのあの字も見えない。

「最近ムノイさんも過保護だし―」

あの人はなまじ熱血だから対処に困るのだ。

『そんなことをするなっ！お前のか弱い心が折れてしまっっ
だかなんだか。』

私の心がか弱いだなんて…どこをどう見ているんだあの人は。

「シンデレラは…いつもどおりか」

『ガハハハッ、ソーネはおもしろいな！』
とのこと。

うーん、これって褒め言葉として受け取っていいのかねー？

「それにしても、私ってこの世界に知り合い居ないな―」

隊長とムノイさんとシンデレラ。

この三人だけ、かあ…。

もう少し交流の場を広げてみてもいいのかもしれない。

例えば、合コンとか…。

まあ、もとの世界では誘われることが皆無に等しかった訳だけれども。

そういう容姿に育ってしまったのだからしょうがないよね。
そもそも、この世界に合コンがあるかどうか…。
せいぜいお見合い程度か。

「お見合いする気はないんだけどねー」

そもそもお見合いしてくれる人が居ないだろう。
そんなことを考えながら…というか、そんなことを一人呟きながら、
どんどん森の奥へと入っていく私。

うーん、奥へ行けば行くほど…：…明るい場所だ、ここは。

「危なくなんかないよねー」

そう考えていた私がどうやら馬鹿だったようです。

川のせせらぎの音がだんだん大きくなってくる。
もしかして、川にだんだん近づいてる…？

お、泳げたりするのだろうか…。

というか川の水って飲めるのか…？？

そんな疑問を抱えつつ、音のする方向へと歩く。

「こつち…かな…？」

いくら異世界でも、川に人魚とかは居ないよねー。

お気楽にそんなことを考えていた私だったが、次の瞬間、その考えを改めることになる。

……人魚は居なくても、美形の王子様は居るみたいだよ、異世界

には。

私の目に飛び込んできたのは、サラサラの髪を水でしならせた、世間一般で言う王子様だった。

……美形だ…。

これは、隊長やムノイさんのレベルを遙かに超えた美形だぞ…。そもそも隊長とムノイさんが美形なのかという疑問は置いておいて。

川で水浴びをする王子。

じよ、上半身裸ですけどっ。

いいんですか、これ。

畜生、カメラがないのが惜しい。

ああ、いいからだしてやがるな王子様。

髪色は少し目にいたいショッキングピンク。

服装はいかにも王子ですと主張しているようにド派手。

腰に差した剣、ひらりと翻ったマント、すらりとした身長。

かーっくいー……。

そのときだった。

王子様が、ちらつと此方を向いたのは。

「お主…何やつなのだ？」

「わっ私は、絵衣『爽田…』そ、ソーネとお呼び下さい…!!」

「ふむ。ではソーネ、」

ああ。

声が素敵。

どうしよう。

すっごくタイプだ。

かっこよすぎる。

これぞ異世界とりっぶの王道よね！

素敵王子様と結婚、らららランデブー！

私がハートの視線で王子様を見つめる中、本人は、少し目を細めてこう言い放った。

「僕の愛人になれ」

015:いかにも僕は、（後書き）

これで？の登場人物は最後です（多分）
素敵王子様とのフラグはどうなる！？

016：粘着質に執拗に（前書き）

今回…ソーネちゃんが押される…かもです。
主人公最強…じゃなくなる、かも……。
見方によつては常に最強ですけどね。
若干王道に戻った…かな？

016：粘着質に執拗に

愛人。

王子様は、確かにそう言った。
そのつややかな唇で。

「おい。ソーネ。聞いておるのか？」

「……」

「僕の愛人になれと言っているのだが。それとも……」

“僕に見とれちゃって、聞こえてないのかな？”

気づけば、王子様と私の距離は数センチになっていた。
素敵な声が、私の耳元でささやく。

「……おう、じ、さま……？」

「そうさ、いかにも僕が、王子だよ」

うつわ偉そー！

イケメンだけどこれはさすがにちよつと引く。

私の顔が引きつり気味になったことに気づいていないのか、王子様はきらきらオーラを振りまきながら、私の顔に両手を添えてきた。

ちよ。

ちよちよちよおおつと、待って！？

私の今の状況いたい何！？

カアアツと顔が熱くなる・

ま、まさか、これって…この状況って…
ききき、…キス、の状況なんじゃ…??

待って待って、私ファーストキスまだなんですけどっ！
無理無理無理、いきなりキスとかありえないし…っ。

「おおお王子様っ、私、まだそういうのはっ…未経験、でありましてっ、」

「大丈夫。僕が快楽へと連れて行ってあげよう」

「ひいひいひいっ、キスは、好きな人とするものですうつ…！」
「ならば、君が僕を好きになればいい。そうだろう？」

はいそうですね。

…なあーんて、誰が言うかあああああ！！

「こんのナルシスト王子めが！気持ち悪いわ粘着質め！」

「っな……。この僕にそのような無礼な態度、いかなものかつ」

「貴方のそういうところがナルシストだと思うのですが」

「ナルシストとは何だ？ソーネ、この僕に教えてはくれまいか…」

うわああああきらきらビームをぶっ放すなあああああ。

こっちが恥ずかしくなってしまう。

そもそも、顔がいいんだから、ナルシな仕草も結構似合っ
っているのだ。
嘆かわしい…。

「ナルシストとはつまり貴方のような人のことを表す言葉です」

「おお、要するに僕のように美しく可憐な青年のことを表す言葉
のだな」

「違います」

王子様のまわりには明らかにお星様が散っている。

『さあっ僕を照らしておくれ！美しく、可憐に、そして爽やかに！』

残念ながら当人は爽やかとはほど遠い人だけど。

私、粘着質な人って不潔な人の次に嫌いなのだ。

「ところで、ソーネ。僕のあいじ、」

「お断りします。断固拒否。拒否拒否拒否」

「まあそう言っな。僕にほだされなかった女性はこの世に居ないよ？」

「私はほだされませんから。では」

この森に、危険なものはない。

その考えを改める私。

危険な人物、居ました。

ここに！！

私、貞操消失の危機です！！！！

たいちよーたすけてー。

「そそそそうだっ、王子様、お名前をお教えくださいー！！」

「ん？僕の名前？？ああ、まだ名乗っていなかったね。僕は、リグト＝ウォールナト。ここ、ウォールナト王国の第一王子さ」

へー。

そうですか。

私が淡々と王子を見つめると、王子が何故かあたふたしだした。

「ソーネっ、君は…、僕のことを恐れもしないのかい？」

「いや、恐れてますけど」

貴方に貞操が奪われそうということで十分恐れています。
怖いです。

恐怖です。

「そんな様子がみじんにも見られないのだが…」

「いやいや、恐怖に怯えていますって」

「…いや、そっちの恐れるじゃなくて…」

どの恐れるなんだ？

恐怖の恐れるじゃない…ってことは…？

「僕は王族だ。はつきり言っただけ。そこら辺の貴族などよりも、階級が数段階上だからな。それなのにソーネ、お前は…恐れおののかない。この僕に」

偉そーだな、王子。

世界中の誰もが、自分に跪くと信じているタイプか。

…なんてたちの悪い、

「私は…というか、私のもと居た世界では、王族とか平民とか、そういう差別がなかったの。私は、もと居た世界のルールを尊重します。だから、私は貴方にひれ伏すことはないでしょうね。…そうだ、王子様の年齢は？」

「二十歳だが」

「なら一応敬語は使わせて貰います。ですが、言っておきますけど、これは貴方が王族だからとかそういう問題ではなく、貴方が私よりも長くこの世界に居て、たくさんを知っているからです。それに対する尊重です」

ここは譲れない。

この国の制度がどんなものか知らないけど、私は、差別なんて許さない。

同じ人間同士、清く正しく競い合って生きるべきなのだ。

「私は、王族という貴方の身分を尊重しているのではなく、貴方自身のことを敬っています」

そう告げると、王子はぽかんと口を開けた。
まるで、信じられないモノを見るような目。

…なんか、そんなにまじまじと見られると……恥ずかしいかも…？

「ソーネ…、」

「な、何ですか…？」

「僕の、愛人になってくれ！」

結局言うことソレですか…！

…あーもう。

一人でやってくださいよ、ったく。

「それじゃリグト王子、サヨナラ」

「ちよつと待つんだソーネ」

「…何なんですか、次は」

次に「愛人」という言葉が出てきたらぶん殴ってやろう。
心の中でそう決意する私。

「ソーネ。僕の奴隷になれ」

……確かに、「愛人」じゃない。
違う、違うけど……、

ぶん殴ってもいいですか。

016：粘着質に執拗に（後書き）

んー王子強いわー

尊敬するわー

うん。

いろんな意味で。

017：蹴倒すなだれる宙を舞う

「どどど奴隷になんかなるもんですか！」

「…ああ、すまない、言い方が悪かったな。僕の召使いになつてくれ」

「あんまり変わってないし！つていうかどうせやること一緒でしょ！？嫌です、お断りさせていただきますっ」

王子のきよとした顔。

素直すぎる視線が、私を捕らえる。

まるで、“何故僕の命令を聞かないんだ？”とでも言いたげな…。
というか、そう言いたいんだろうけど。

「何故僕の命令を聞かないんだ？」

本当に言いやがったー！！！！

「私は貴方のことを決して好いている訳ではないからです」

きつぱりはつきりと断れば、王子がバタツと倒れる“演技”をする。

さすがです、王子。

可憐でセンチメンタルな王子役になりきっていますね。

「僕の美に惑わされないなんて…！」

「…」

「おお、可憐な美少女よ、僕のために働いてはくれまいか。この美しい僕のために!!」

「嫌です」

王子の後ろにガーンという文字が見える。

…分かりやすいですね、貴方。

「何故だ…何故この僕に逆らうのだ…!」

「貴方に支配される義理がないからです」

そうなのだ。

王子の奴隷になる義理も恩もない。

「…それでは、この僕を森に一人で置いていくというのか…?」

「……」

それはそれで危険だ。

この森の動物たちに危害を加えるかもしれないし。

それどころか、街に一人で飛び出していつて、住民の方々に迷惑をかけるということもあり得なくはない。

「置いていくのかい!?!」

捨てられた子犬のような瞳が私を捕らえる。

…うう。

かつこいい…とは思えなくなっただけ、かわいいと少し思っ
てしまっ
た。

「…わかりましたよ!取り敢えず着いてきてください!」

このことが、事態を悪化させていくことに、私はまだ気づいてなかった。

取り敢えず着いてこい、とは言ったものの。

隊長の居ない屋敷に連れて行くのは不安だし、（貞操が奪われそうで）

かと言って他に行く当ても……、

「っそうだー!!」

シンデレラ!

シンデレラの家に関連して行って、シンデレラと一緒に、この王子をどう始末するか考えよう。

私の負担も減るし、シンデレラなら親身になって聞いてくれるはず。

というわけで、シンデレラの家に向かって、王子と歩くことにしました。

「っちょ、そ、ね、ま、っ」

「何ですか、王子。どうかしました?」

森から数百キロほど歩いたときだった。

王子が、歩く私にストップをかける。

…妙に息が荒くないか…?

……ま、まさか喘息持ちとか!?

「王子！喘息持ちなら、そう言ってください！」

「ぜそく、ちが、ぼく、つかれ、」

「……は？」

駄目だ。

何語？

今まで日本語で通じていたのに。

いきなり違う言葉に変わってしまうなんて！！

「はあ、っ、っ……疲れたから休ませろ……！」

王子はそう叫んで、ぱたりと倒れた。

……え！？

「ちょっと、王子！？王子っ、しっかりしてください、王子……！」

まだ少ししか歩いてないのに！

シンデレラの家まではあと一キロくらいあるんだけど……。

ひ弱すぎる！

なんで！？

王子……貴方、体力ありませんね。

「ん……す、すまん、ソーネ。僕は今まで、歩くことを強いられたことがないんだ。王族だからね」

一々しゃくに障るしゃべり方だな。

一言多い。

なんとかしゃべれるようになった王子が、ぼつぼつと語り出す。

「どうでもいいですけど、もう少し歩いてくださいよ、王子」

「も…無理、」

「行きますよ」

「待てえええー！！そこはこの美しい僕に手をさしのべるべきだろ
う！」

「知るか！！！」

誰がさしのべてやるか！

自分のことを美しいとか言っな！

さっさと行きますよこのへボ王子め！

「そおねええ…っ」

「……わかりました。仕方ないから…“仕方ないから”私が王子を
背負います」

「ふっやつと君も僕の魅力に気づいたんだね！」

「それどころか貴方の身勝手さと粘着質さに呆れるばかりですよ」

「おお、残酷な言葉！」

「それくらい話せるなら歩けますよね、私が背負う必要ありません
よね」

「げほっげほっ、ぐるじい…っ」

大嘘つきめ。

ペテン師。

私がギロリと王子を睨むと、王子は軽やかに目を反らした。

……目を反らすな。

「さあっ、私の背中に乗ってください、王子」

「ああ。セクハラはやめてほしいな」

「誰がセクハラなんかするかあ！！」

王子は思ったよりも軽かったけれど、やっぱり大の男を背負うのは相当なことだった。

こういうとき、いつも掃除で鍛えている体力が役に立つ。

「おんどりやああああ！掃除命・清潔愛！」

「そ、ソーネ、何も、走らなくてもいいんじゃないかつ、」

私の背中は恐らく揺れるのだろう。

でもそんなことを気にしてはいられない。

「うつさい、おぶられてる人間に文句を言う資格はない！」
「そんなつ、」

抗議をする王子。

でもそんな声は私の耳には届かない。

残念でした、王子様。

私は貴方に従うような馬鹿ではありません。

「もうすぐーっ！！」
「あああああっっ」

意味不明の叫び声をあげるのは、もちろん王子だ。
全く、これだから運動慣れしていない人間は困るね。

今更、大声を出したって、止まらないのだから。

「とりゃあああー！」
「ぎゃあああああっっっ」

シンデレラの家が見えてくる。
もう少し。

あと五十メートル。
一気に加速する私の足。
もう止まらない。

止まるはずがないのだ、ここまで来て。

「しいんんでえれえらあああ!!」
「ーッ、」

王子が私に、完全にのしかかる。
うわっ、重たい。

今までは一応遠慮していたらしい。
でも、王子の重さで止まる私じゃなくってよ。
というか、セクハラは禁止なのに。
のしかかるとか明らかにセクハラじゃないの？

「あああけええてええええ!!」

もう何も叫ばない王子。
さすがの王子も諦めたか。
まったく、しつこかった。

「ソーネ、呼んだかあ？」

シンデレラの家扉が開く。
そこに立つ、可憐な乙女シンデレラ。
ふふふさすがですねシンデレラ、貴方はいつでもどこでも美しい
ことで。

「呼んだわあああああ!!」

どとどとと砂煙をたてながら、シンデレラへと突っ込む私。
シンデレラの目が見開いた。

ふふふっ驚くがいいわ、シンデレラ。

「おう!?!」

「おじゃまああしますうつ!」

派手な音が辺りに響く。

シンデレラが私に蹴倒されてぶっ倒れ、私はシンデレラの家にな
だれこんだ。

シンデレラの家に入った瞬間、私は王子を背負っていた手を放す。
すると、王子はふらーっと宙を舞い、シンデレラの家壁に激突
した。

……あーらら。

「ガハハハッ!これはどういうことだあ?」

豪快に笑うシンデレラは、どこまでも心が広いと思った。

017：蹴倒すなだれる宙を舞う（後書き）

シンデレラ登場ーっ

できれば20で終わりたいけど絶対無理だわさww

たぶん23とかそのくらい。

びみょー。。

頑張って25までのばすか、頑張って20までに縮めるか…。
いつそ22にするか。

018：王子様の初仕事（前書き）

んー。

そういえば思ったんですけど。

この話「甘甘」とか書いてるわりに甘くないなーとか（（

018：王子様の初仕事

「と、いうわけなんで、少しの間、王子と私をこの家においてくれないかな？」

「任せる任せる！部屋は有り余ってるからな！ソーネとこの王子とかゆーヤツは一緒の部屋にすればいいのか？」

「五十キロメートルほど離れた部屋でいいよ、シンデレラ」
「おう」

豪快に笑うシンデレラ。

ぐったりと倒れる王子。

おやおや、王子はお疲れのご様子で。

…でも、居座らせて貰う分際で、眠らせる訳にはいかないのだ。

「起おおおきいいろおおおおおおおおおお！……！」

腹の底から声を出す。

突然の私の大声に、シンデレラの目が点になっていた。

ごめんね、シンデレラ。

今からこの甘ったれ王子を働かせて、シンデレラに楽をさせてあげるから、待っててね。

「ひえっ…！…って、なんだ、ソーネか。おはよう、ソー、」

「おはようの挨拶はいいから、まずこの屋敷の主に挨拶！」

私はそう言っ、シンデレラを指さした。

「主…？ああ、君かい？なんて可憐な女性なんだ…！君のように美しい女性は見たことがないよ。このきらびやかに輝く髪も、純白の肌も、華奢な体も…、なんて素晴らしいんだろうか」

「ガハハハッ、ありがとよっ、おうじサン」

王子のネチネチとした褒め言葉を、豪快に跳ね返すシンデレラ。このシンデレラの態度に、さすがの王子もぼーんとしている。あれれ、王子様ってば、お口が開いておりますわよ、うふふ。

「王子、挨拶は口説き文句じゃないでしょう。『本日はお世話になります』くらいのことを言っ、頭を下げるんです」

「何故僕が頭を下げなければならないのだ。王子なのに」

「今貴方は、シンデレラに世話をかけているんですよ？迷惑かけますという気持ちをこめて頭を下げましょう」

「嫌だ。…今日は世話になるぞ、シンデレラとやら」

「おう！そのかわり、たっぷり働いて貰うがな」

ニヤーっ、と笑うシンデレラ。

錯覚かな？

今シンデレラの後ろに悪魔が見えたんだけどね。

「ハタラク…？それは、書類にはんこを押せばいいのだろう？」

王子がきらびやかな笑みを見せてくる。

…なんだか哀れだ…。

この人はきつと、楽な仕事しかやったことがないのだろう。

だからと言って、手加減はしてあげないけど。

「違いますよ王子。私と一緒に、“お掃除”しましょう」

王子の顔が、ぐにやりと歪んだ。

「そこおおお！もつと腰を入れて磨けええ！！！」

「な、なんでこの僕がこんなことを…っ、」

「頑張れよー、王子サン、ガハハハッ！」

「王子サボンなさつさと磨けー！！！」

腰がヘタレておるぞ！

しっかりしろー若者だろお前さんよう。

今、我々はシンデレラの家のお掃除をやっている。

ちなみに、ただいまの作業は廊下の水拭き。

ぞうきんでごっしごっしと磨いて折る途中だ。

「王子ーっ、腰だ腰ー！」

「ソーネ、休憩しないかつ、」

「何言ってるんですかつ、これ磨き終わらないと休憩なんてできるわけないでしょー！！」

打ちのめされる王子。

豪快に笑うシンデレラ。

ごしごしと床を磨き続ける私。

「ソーネ、この床、もうピッカピカだぞ！ 見ろ！ ほら！」

「そのくらいいいだろ、僕が磨いたんだぞ！」

「あつまーい！！」

その考えがまず甘い！

甘っちょろいのですよ王子様！

そんなんで国を治めようとか甘いにも程がある！

一国の王子ならば床磨きの一つや二つでkindでどつする！

「な、何が甘いんだソーネ！」

「ほこりが一つだ一つだと言っているうちにどんどん溜まっていくですよ。それに見てください、この角の所を」

「何だ……？……あ、」

「どうです？ここにほこりが溜まっているでしょう。これが、ほこりの魔窟！」

おお、とどよめきが王子から上がる。

シンデレラは…寝てるし。

まあいいが。

「さあ、ほこりを退治するのです王子！」

「任せろソーネ！ほこりの大魔王を退治し、姫を手に入れるんだー！」

「しかしお待ちください王子。ほこりは雑巾では駄目です。そう、ほうきを使わなければなりません！ザコのほこりを退治したその後にくすみという大魔王が居るので、そいつは雑巾で退治するのです」

「なるほど！さすがソーネ、いいことを教えてくれたな！」

ふっ、王子なんてちよいぜ…。

私が内心ほくそえんでいると、王子がせっせとほうきを取ってきた。

それと一緒に、もう一つ雑巾も取ってきたようだ。

……っ、おい。

ちよっと待つて。

待つてください神様アーメン。

「お待ちください王子！」

「ん？なんだソーネ」

「その…その“金の雑巾”はどこから取ってきたのです？」

「これか？これはそこらへんにあったやつを…、」

王子が手に持っているのは金の雑巾。

私が、あのクソリプルからもらった雑巾だったのだ。

…おつかしいな！。

私の記憶だと、隊長のお屋敷に置いてきたはずなんだけど。

何故ソレガココニアルノダ？

「そこらへん…ですか…。まあいいや。その雑巾で適当にふいちゃってください」

…うん。

弁解しておこう。

私は、本当に知らなかったのだ。

全く、全く知らなかった。

この雑巾の威力というものを。

018：王子様の初仕事（後書き）

300pt感謝感激ですん！

お気に入り小説登録100超え感謝感激ですん！

そして来週はきつと更新できません（申し訳ないです…っ）

ちと…旅行に行きますので。

旅立ちが明日なんです。

下書き終わってないんです↑

無理ですね。

というわけで、来週はお休みとさせていただきます。

ご迷惑かけて申し訳ないです（しかも結構いいところで止めちゃったぜてへ）

019：雑巾と頭がゴツンゴ（前書き）

雑巾の秘密は、？にも続きます。
ていうか？ではまだ明かされません^^

019: 雑巾と頭がゴツツンコ

最初に悲鳴が聞こえたのは、王子が雑巾を使い始めてから数分が経ったときだった。

私とシンデレラは隣の部屋の掃除をしていた。

そんなとき、あの悲鳴が聞こえたのだ。

「キャアアアアアアアアアアア！」

…情けない。

純情可憐な乙女のような悲鳴をあげる王子。

私達は、隣の部屋の掃除を切り上げて、どたばたと廊下へ集まる。

「王子！？どうかしましたか！？」

「王子サン、どうかしたのかあ？」

「ひいひいっ、あああ、あれ、あれ、あれっ、」

しきりにあれと呟きながら、何かを指さす王子。

私とシンデレラが、王子の指先を見つめる。

するとそこには、何の変哲もな……くもない金の雑巾があった。

それと、その雑巾の隣に大きなゴミの塊も。

「金の雑巾がどうかしましたか？」

「ぞぞぞっ 雑巾、が、動いっ、ゴミ、吐く、怖い、怖い、怖い、」

「はいはい王子落ち着いてくださいよ」

「落ちて着けよー王子サン、ガハハハッ！」

そんなに慌てて。

王子らしいと言えば王子らしいけど…。

まあでも、この説明では理解不能だから、王子に問いつめてみることにした。

「王子。で、この金の雑巾が動いたんですか？」

こくこくと上下に首を振る王子。

そういえばこの雑巾って、雑巾自身が汚れることを嫌がってたっけ。

私はそれを思い出して、はあと一つため息をついた。

それにしても、それだけでこんなに驚くものなのだろうか。

「動いて、それでどうしたんですか？」

「ぐぐぐ、ごみ、吐き出す、した」

ゴミを吐き出した…？

どういうことだ？

吐き出すも何も、雑巾はピカピカで、ゴミなんて吸い取っていないはず。

吸い取らせようとすると逃げるのだから当たり前だ。

それなのに吐き出す？

そもそも、雑巾が吐き出すなんてことがあるのか？

…いや、雑巾がゴミから逃げるということがあるのだから、吐き出すということもあるのかもしれない。

この世界では、私の常識が通じないから困るのだ。

「だから怖かったの？」

上下に大きく首を振る王子。

…あーあ。

一国の王子がこんなんでいいのかしら、ホント。
あきれちゃうわ。

「大丈夫よ、王子」

「王子サン、心配すんなって！」

「こここわっ、こわっ、こわっ、」

怖いのは分かった。

まあ確かに怖いだろうけど。

あまりに…情けないと思う。

もう少し力強くなりなさい！

そのときだった。

目の前の金の雑巾が、いきなり飛び跳ねたのは。

「わっ！？」

「おお！？」

「うわあああああまただあああああ」

頭を抱え込み避難する王子。

ちょ…っ、か弱い乙女おいて逃げるんじゃねーよ！！

残された私とシンデレラは、顔を見合わせた。

「どうしようか、シンデレラ」

「んー。王子サンの言う通り、ゴミを吐き出すなら、とっとと追っ
払っちまった方がいいんじゃないの？」

「そうよね。…行きますか」

「おう。行くか」

私は、近くにあつたほうきを手に取る。

掃除の道をこれまでずっと歩み続けてきたけれど、まさかほうきでゴミと戦う日が来るとは思わなかったわ。

シンデレラは、ぎゅっと拳に力を入れた。

……アンタはそれで戦うのか。

金の雑巾が徐々に暴れ出す。

くいつくいつと体をねじらせながら、少しずつゴミを吐き出していった。

…これは本当に吐き出している。

いつゴミを吸い取ったのだ、此奴は。

そんなことを考えながら、私はほうきを雑巾に向けた。

シンデレラが、すーっと息を吐く。

突撃の合図は、シンデレラの大声だった。

「うちの家を荒らすんじゃないやねえええええつ、！」

私がほうきを雑巾に向けてたたきつける。

すると雑巾は、更にゴミを吐き出す。

叩くと逆効果なのか！

シンデレラは足蹴りで吐き出されたゴミを家の外に追い出す。

そっちは任せるとして。

どうするべきか…。

「ソーネ、危ないぞっ！」

「え？…あつ、」

油断した。

少し雑巾から目をそらした際に、雑巾は私にせまってきた。

リプルめ、私に反抗する雑巾なんてくれないでよ！

今さらそんなことを言っても遅いが、私はリプルを恨んだ。

この様子だと、もうすぐ雑巾が私の顔に当たるな。
相当なダメージだろう。

あー…お風呂入りたくなってきちゃった。

今さらよける気はさらさらない。

私は、自然体で雑巾を身構えた。

王子と出会ったことで、多分私の運命は少しズレたのだ。

…王子は、典型的なトラブラー！

要するに、トラブルを巻き起こす天才というわけだ。

……つたく、王子のせいだ…！

当の本人はさっさと逃げちゃったし。

どうなってるのよ…もう。

そんなことを考えている間にも、私と雑巾の距離は狭まっている。

シンデレラがだっしゅで近づいてきているのが分かった。

でも多分無理。

多分手遅れ。

何故なら、私と雑巾の距離はもうあと十？ほどしかないから。

私が覚悟を決めたそのとき。

玄関の扉が開いた。

「ソーネつつ、居るか!？」

ぶしっ。

鈍い音が響く。

それと同時に、私の鼻にツーンと来る臭いがした。

……さすが雑巾。臭いぞ。かなり。

扉の外から現れたのは隊長。

…何故ここに…？

ていうか。

ていうか、もう少し早く来てくれれば…私は雑巾に顔面をぶつけなくて済んだのに。

隊長が目撃したのは、私が雑巾にぶつかったまさにその瞬間だった。

019：雑巾と頭がゴツンコ（後書き）

隊長：なんて間の悪い男！。

なんとか更新できました！

更新できないとか言っておきながらすみません；

一発書きなので多少文章が荒いのはご愛敬♪

020：一緒に居たい人と帰りたくない人（前書き）

ソーネと隊長口争い。

020：一緒に居たい人と帰りたくない人

「…ソーネ。何を、している」

いつもより低い声で、隊長が私を脅す。

隊長のまわりの温度が氷点下零度のようにです。

ああ寒い寒い。

私は、顔にべたつと張り付いている雑巾をはがすと、隊長に向き合った。

「掃除していますが、何か？」

「何か、じゃないだろうが!!」

珍しく隊長が起こってる。

それも本気で。

意外と迫力あるものだな。

変なところに感心してから、私はにへらつと笑った。

「嫌だなあ、隊長つてば！ちよつとお散歩して、ちよつとシンデレラの家に着って、ちよつとお掃除して、ちよつと雑巾と格闘しちゃってるだけじゃないですかー！」

「ちよつとが多すぎる！しかも最後のは意味がわからん！」

更に珍しくツッコミ口調。

いつもはただ、流して聞いているだけな気がするのに。

……あ、でもたまに突っ込んでるか。

「ホントなんですよ。金の雑巾の馬鹿野郎が私めがけてひゅーっと……」

「……言い訳はいい。いいから、屋敷に帰るぞ」

がしつと襟首を掴まれる。

ひょわっ！？

急に視線が高くなって、これが背の高い奴らの世界かななどと思っ
ていると、隊長にぎろりと睨まれた。

む……無言の圧力……っ。

「帰りません！帰りたくないです！下ろしてください！！」

「嫌だ。帰るぞ」

「やああだあああああっ！」

駄々をこねると、隊長が少し戸惑った。

よし、今まで多少なりとも猫を被ってきた甲斐があつたな。
しめしめとにやついていると、隊長の眉が片方上がる。

「……やっぱり駄目だ。帰る」

「嫌だつて言ってるじゃないですか！酷いです、訴えますよ、この
卑怯者！だいたい私は貴方に指図される義理ないんです！」

キツと隊長を睨め付けると、一瞬隊長がたじろぐ。
でも、すぐに威厳を取り戻す隊長。

「お前が嫌だと言おうが私には関係ない。義理などなくても、私は
お前を屋敷へ連れて帰る」

「やめてください、このロリコン！！隊長がそんな風なら、私、シ

ンデレラの家泊まらせてもらっからいいです！」

ね、とシンデレラに呼びかけると、シンデレラは困ったような笑みを返してきた。

「すまん、ソーネ。あたしところはちょっと…お姉様達がつるせえからさ、泊まらせるのはちょっと…」

「…というわけだ。帰るぞ、ソーネ」

「な、なら、ムノイさんの家に泊まらせてもらいます！隊長の屋敷よりマシです、多分！！」

そう言うと、隊長がぴしつと固まった。

その後ろから、ひよこつと飛び出る影…あれ、どこかで見たことがあるような…。

「うおお、ソーネ、お前俺のここに来るのか？いいぞー、一緒に青春しようぜ！！」

…どこかで聞いたことあるような…。

ああ、ああ、もう少して思い出せそうんだけど…、

「ムノイさん！！」

「ムノイ、お前は下がっている」

私と隊長の声が重なる。

にらみ合う私と隊長。

バチバチ、と火花が飛び散った。

「なんだよー、冷たいな、ダーティは。ソーネ、俺はいつでも歓迎だぞ！さあ、俺の胸の中に飛び込んで来るんだ、さあ！」

「すみませんやっぱり遠慮しておきます」

「ということでソーネと私は帰る。任務は一時中断させてもらう」

なんて身勝手な!!

私はまだ帰るなんて一言も言っていないのに!

せめてもの反抗にと、私は隊長の手をぱつと振り払い、ムノイさんの後ろに隠れる。

隊長があからさまに嫌な顔をし、ムノイさんの耳が真っ赤になる。

そのときだ。

どたどたと、と騒がしい足音が聞こえてきたのは。

本能的に、マズイと思った。

この足音。

ああ、分かる…分かってしまう…、これは、目だちたがりの王子の足音だ。

私とシンデレラ対金の雑巾の決闘が終わったらしいと践んだ王子は、ようやく自分の安心を確認して戻ってきたらしい。

「やあ諸君! 僕のために戦ってくれてありがとう!!」

ド派手な演出で登場した彼に、その場の空気が一瞬軽くなり、そしてずしーんと重くなった。

…あちゃあ。

なんだかやらかしてしまっただようですよ、王子様。

「…王子。何故ここに」

「王子様じゃねえか! 俺達が長い間必死に探し続けていた王子が、

なんでソーネ達と一緒に居んの？」

「王子、なんてタイミングが悪い登場ですか！もう最悪です、王子ってホント馬鹿ですよ」

「ガハハハッ！さすがだ王子、おもしれー」

隊長、ムノイさん、私、シンデレラの四人から次々に言葉をかけられ、王子はきょとんとする。

「なんだ？皆、どうかしたのか？ん…？ああ、お前達は、聖騎士の隊長と竜騎士の隊長だな。どうした、こんなところで？」

全く状況を理解していないのは私もシンデレラも一緒だけど、王子は私達よりも馬鹿だった。

王子以外の四人で一斉にため息をつく、王子に変な顔をされた。

……王子。

貴方って人は本当に……、

020：一緒に居たい人と帰りたくない人（後書き）

隊長が怒った怒ったー！

あと2話で終わる予定…だったけど無理かもしれないorz

021: 全ては誰のせいでしょう(前書き)

金曜日更新できなくてすみませんでした。

諸事情により更新を断念させていただきました、申し訳ありません。

021: 全ては誰のせいでしょう

状況を理解していない私とシンデレラ、そして更に理解していない上に馬鹿な王子のために、隊長は嫌々説明をしてくれた。

屋敷に帰りたくて仕方がないというような隊長の視線を無視して、私は隊長の話を急かす。

「……このリグト＝ウォールナト様は、我がウォールナト王国の第一王子であり、ゆくゆくは王になる存在なのだ。…この国にはリグト王子の他にももう一人、第二王子が居るが、その方は既に王族としての権力をほとんど放棄しており、リグト王子が王になるのは必然だと噂されている」

王子ってそんなに偉い人だったのか！。

そうはみえなけど。

もう少し賢くてもう少し爽やかでそれと粘着質を取り除いてくれたら、偉い人っぽくなるのに。

…あと、無類の女好きというところも取り除かないと駄目だな。

そう考えると悪いところだらけである。

王子ってば、全くだ。

「そうだ、僕が王子になるのは必然であり運命なのだよ」

偉そうに言う王子だけど、それって第二王子さんが権力を継ぐことを辞退したからでしょうが。

第二王子さんに感謝するべきだと思っけど。

「……まあ……そういうこと、にしておこう。……あー、それで、この王子はのんびりと城で暮らしていた訳だ、つい昨日までは」

なるほど、贅沢三昧だったって訳か。

羨ましいな畜生。

……でも、私はやっぱり掃除三昧の方が嬉しいな。

うん、やっぱり今の暮らしが私に合ってる。

「だが、王子は……」

隊長が言葉を切って、王子に目配せをした。

王子はパツと顔を輝かせ、胸を反らしてこう言う。

「僕は城のつまらん生活に飽きて、逃げ出したんだ！」

……威張れることじゃないだろ。

王子以外の全員がためいきをつく。

「だって、城の生活なんて、仕事仕事勉強稽古仕事仕事、の繰り返しではないか。この僕は、もっと優雅に自由に暮らしたいんだよ。女達と毎日遊び、一日一日取っ替え引っ替えて女達を……」

「……要するに王子は仕事から逃げたんだ」

隊長がばっさり切り捨てると、王子はさすがにしょぼんとうなだれた。

おやおや、この王子がうなだれるとは。

そして、語り役はまたまた隊長になる。

「普通なら、すぐにとっつかまえるのだが…何しろこの王子はトラブルをよせつける大天才でな。…王子の行くところ全てで、何かが起こる。我々は王子を追いかけながら、そのトラブルを解決するというハードな任務をこなしていたのだ」

だから帰ろうソーネ。

とても言いたげな視線がこちらに向かってきたけど、無視。

二度と帰るものか。

いざとなったらムノイさん家に住み着いてやる！

「……そのせいか、王子の逃げ足は速かった。…まあ、我々がトラブル解決に気を取られていたというのもないわけではないが」
「そうなんだ、俺達は燃えた！！」

黙ってくださいムノイさん。

シンデレラからは憧れの眼差しを、私と隊長からは軽蔑の眼差しを受けたムノイさんは、口を閉じた。

ちなみに王子はと言うと、隊長を恨みがましく睨んでいる。

反抗期一直線だな。

…ずいぶん年を取っているが。

「…そして、我々は王子を見失った。どこに居るか見当もつかなくなった。それで、探していて、この家を搜索しに来たら…この通りだ」

苦々しげに呟く隊長。

あははー、なるほどねー。

要するに全て王子が悪いと、そういうことですねなるほど。

「……ちなみにソーネ。王子はどこに居たんだけ？」

「屋敷の近くの森です。水を浴びてました」

「……あそこか……」

「はい。じゃ、そういうことで」

私がそそくさと逃げ出す。

なるべく自然に自然に……。

そのとき、私の腕を何かが掴んだ。

「待てソーネ！お前は僕の愛人になると言っただろう、あの約束を忘れたのか」

…馬鹿王子めが。

王子のせいで逃げようとしていることが隊長にバレ、しかも、愛人だの何だの言われてしまった。

シンデレラは頬を赤く染め、ムノイさんは口を開けすぎて顎をはずし、そして隊長は…

猛烈に怒っていた。

「王子！私そんな約束してませんよ！何嘘言ってるんですか！！」

「え？そうだったか？…ああそうだ、ソーネは僕に見惚れてて、それで……」

「あああああーっ！！空気読め阿呆王子！」

見惚れてなんか……ないとも言えない、けど！

それをこの場で言う必要はない！

全くないから！

そのとき、低い低い声が聞こえた。

「……ソーネ。屋敷に帰って、事情を説明してもらおうか」

恐ろしい程笑顔の隊長が、そこに居た。

私が声にならない悲鳴をあげる。

王子はぽかんと突っ立っている。

誰のせいだと思ってんのよ、あの馬鹿王子！！

「た、隊長、これには深い事情が…」

「なるほど。それじゃあその事情とやらを、私に話して貰おう」

「ひいひい、ちよ、ど、どこ触ってるんですか隊長！うわ、ちよ、

お姫様抱っこしないでください、降ろせえええー!!!」

「……帰る。邪魔したな。ムノイ、お前は王子を城に連れて行け。じ

「やあな」

王子…私、アンタのこと一生恨むわよ…！

「おおおろおおせえええええええええ！！！」

「却下」

021: 全ては誰のせいでしょう(後書き)

次の次でラストになる予定です。

…と言っても、まだ「異世界大掃除？」がありますが；
もうしばらくお付き合いを……！

そして更新遅くなり、本当にごめんなさい。

022: さよなら隊長(前書き)

今回「王道大好き」な方には辛い結末が待っています。
ご注意を！

022:さよなら隊長

もう、夕暮れ時かー…。

こっちの世界では結構時間経ってるけど、向こうの世界はどうなんだろう…。

まさか、『こっちでは一年経っても向こうでは一日しか経たない』なんて浦島太郎逆バージョンとか？

……あり得ないか。

「なあ、ソーネ」

「はい？」

前を歩く隊長が、急に口を開いた。

さっきまで、無言で屋敷への帰り道を歩いていたのに。何度逃げだそうと思ったことが。

「…王子に、変なことされてないか？」

「されてませんよ？…多分」

どうしても曖昧になってしまふのは、耳元で喋られたり愛人になれと言われたり奴隷になれと言われたりしたからだ。

変なこと…と言えば変なこと、だしなあ。

「……ったく。…だから会わせたくなかったのに」

隊長がぼそつと呟いた。

え??

だから…ってどういうことだ?

「……王子は、トラブルを引き寄せる天才で。……ソーネは…トラブルの元凶だろうが。…まあ、二人が引き寄せられるのは必然と言えは……必然なんだろうが……」

少し口ごもりながら、ごもごもと喋る隊長。

…ふーん。

そんなことを考えてたんだ。

「たいちよー、心配してくれてたんですかあ?」

「……まあ…そうとも言えるな」

何だそりゃ。

らしいと言えばらしい発言に、私は思わず笑ってしまう。
それを、隊長は怪訝な顔で見つめた。

「たいちよー、ありがとうございまーす」

「……礼を言われる程のことはしていないが、」

「そうですね」

「……」

むすつと黙り込む隊長。

そそくさと早足で隊長は歩き出す。

おわわ、追いつけないってば。

そんなに大股で早く歩かれちゃ、こっちの身がたまらないってものですよ。

…ああ。

いつの間にか私は、隊長から逃げようとしてるのではなく、追いつこうとしているんだなあ。

そんなことに気づいて、気恥ずかしい気分でいっぱいになってしまった。

きゃー、何青春しちゃってるのさ私。

もうそんな年でもないのに。

だって来年は大学生！

花の高校時代は終了して、大人な大学時代に突入するというのに。私はこんなところで何やっているんだか。

「隊長、」

「…ん？」

「私、もうすぐ大人なんですよ」

「……だから、どうした」

不機嫌な声で返ってくる。

何も、今すぐ大人になるなんて言っていないのに。

「だから、もう、私の面倒なんて見なくてもいいんです」

「……だから、どうした」

だから…って。

なんで分からないの？

私が必死に分かりやすい言葉を探していると、隊長がくるりと振り向いた。

夕日が、隊長を照らし出す。

「……私がソーネの面倒を見たい。それだけじゃ、駄目なのか？」

駄目なのか、って言われても。
ていうか、面倒を見たい…？
それってなんてお人好し？

「たいちよー、よくわかんないです」

素直にそう言うと、隊長がふっと笑った。

…きつと微笑んでいるつもりなのだろうけど、どう見てもあざ笑っているようにしか見えない。

隊長も哀れな人だ。

「……分らないなら…今はそれでもいい。…私のそばに居てくれ」

それってどういうこと？

隊長ってそんなに綺麗好きだったっけ。

心に何かが引っかけたけど、私は敢えてそれを無視した。

だって、それに気づいてしまったら、全てが終わってしまうような、そんな予感がするから。

「嫌ですよ」

「……………」

嫌だよ、そんなの。

隊長のそばに居るなんて、そんなの、嫌だ。

私は自分の場所なんていらない。

今隊長の家に居るのは、寝泊まりできる場所が欲しかったただけだから。

隊長のそばに居るなんていう、綺麗な理由じゃないのに。

「私、流れ者ですから。隊長の隣に居座る訳にはいかないんです」
「……………それなら、」

隊長。

私、貴方のこと、嫌いじゃないです。

でも、隣にいたいなんて思えるほど、好きでもないんです。

「私が、引き留めるまでだ」

…無理ですよ。

だって私は、隊長の手の中に収まるような人じゃないですから。

ああ。

駄目だ。

そろそろ、糸が切れる。

「隊長」

「……………どうした」

頭をぼりぼりと掻く隊長。

…どうしよう。

私が、切れる。

「隊長、私のこと、好きなんですか」

固まる隊長。

重い沈黙。

後に残るのは後悔以外の何者でもなかった。
やってしまった。

自ら、この関係を壊してしまった。
私が一番恐れていたこと。
それは、

破滅。

「……それはどういう、」

「どうもこうもないです。私のこと、レンアイカンジョウで好きですかって聞いてるんです」

私の口から出る「恋愛感情」という言葉がやけに冷たく聞こえた。

「……好きだ。ソーネのことが、好きだ。恋愛対象として見てる」

隊長の目が私を捕らえる。

その瞬間に、私は泣き笑いをしていた。
涙を流しながら高らかに笑う。

…あーあ。

住み心地のいい屋敷だったのにね。

あーあ。

ばっかみたい。

「ごめんなさい、隊長。私、これ以上あの屋敷には住めません。だって怖いじゃないですか。自分を標的にしている人と暮らすなんてだから、出て行きます」

「……は、」

理解不能という顔の隊長。
ごめんなさい。

「荷物なんて特にないので、すぐに出て行きますね。あ、金の雑巾は一応持っていきます。それじゃ、」
「待…て！」

隊長の鋭い声。

それと同時に、私の腕を掴む力。
私はそれを、勢いよく振り払った。

王道の展開になどさせてやるものか。
私は出て行く。

それもこれも隊長のせい、なんですからね！

私の目から、もう涙は出てこない。
だって悲しくないもん。

「待てと言われて待つもの居なし！では、さらばです、隊長！」
「おっ…お前が居なくなったら、屋敷の掃除は誰がするんだ…！？」

……そうですねえ。

隊長が恋人をつくるのが一番手っ取り早いんですけど、そういうわけにもいかないらしいですし。

うーん…。
…仕方ない。

「いいですよ。毎週一回だけは掃除しに来てあげます。精一杯散らかしておいてくださいね」

「…あ、ああ…」

呆然と私を見送る隊長。

私は、暗くなった道を駆けていく。

さーてどこに行こうか。

アテなどなにもない。

ムノイさんのところにでも行こうかな。

あ、でも家を知らないや。

そんなことを考えながら、私は暗闇の木立をスキップしながら進んだ。

022: さよなら隊長（後書き）

…まあ。

最初は王道の展開にしようかなとも思ったのですが、割に合いませんでしたね、うん。

無理でしたよ。

所詮ソーネはソーネだったってことです↑おい

まー隊長とはこれからもお友達として仲良くやっていくんじゃないかな？

頑張れ隊長！

次、「？」のラストです！

まあ予告編みたいなものですが；

023：次への一歩（前書き）

エピソード。

短かったのでついでに載せちゃいました

023：次への一歩

勢いで飛び出してきた。
それに後悔はない。
でも……、

…困った。

寝床がない。

ていうか屋根がない。

要するに家がない。

どうしよう泣きそうだ。

「うーあー…せめて、次の居候場所が決まるまで、隊長の家に泊めてもらえばよかったかも…。それ以前に、ムノイさんの家を教えて貰えばこんなことには…」

私は今、街を彷徨っている。

シンデレラにこれ以上迷惑はかけられない。
かと言って、隊長の家にも戻れないし…。

あー、もった、どうすればいいの!?

「今日は野宿かぁ…」

嫌だな。

変な犬とかが襲ってきたらどうしよう。

最悪この身を捨てるか。

私の手荷物の中で武器になりそうなものは……しいて言うなら洗剤類と金の雑巾くらい？

現状を再確認して、更に落ち込む私。

あーあ……。

異世界生活って、もっと上手くいくものじゃないの？

「おーい、！」

突然、空から声が降ってきた。

慌てる暇もなく、ただただ呆然としていると、その声が間近で聞こえるようになって驚いてしまう。

「もしもーし、何ばーっとしてんの？おいらだよー、リ・プ・ル！」

「え……ああ、なんだリプルか………って、はああ！？リプル！？」

リプル。

忘れもしないその名前。

私を間違って異世界へ召喚したというあの阿呆神様の名前。

「ちょ……リプル、あんたねえ……！人を勝手に召喚しておきながらこの様子は何！？おかげで私は隊長の家から追い出されて、こうして途方に暮れているのよ！？」

「どえええっ、でもそれは、おいらの責任じゃないしさ、」

「言い訳は聞きたくない！」

「ひょえーっっ」

全く。

どうしてくれるの、私の寢床。

ふんぞり返ってリプルを見下ろすと、リプルがはっとしたような顔つきになった。

「わ、分かったよ！おいら、罪を償う！」

「そうよ、そうなのよ、そうしてちょうだい。……って、は？？？」

……待った。

凄く…凄く……、嫌な、予感が……、

「君の寢床を確保する！」

リプルがそう言って、何かを叫んだ。

そして、次の瞬間、私は……

お城の門の前に居ました。

「……ああ…また、か…」

“また”トリップしてしまった。

ここはどうやら…お城？の、門の前みたいだ。

それはいいけど…私に、門の前で寝ると言ってるのか、リプルは。

「アイツめ…今度会ったらただじゃ済まさないわ…っ」

燃え上がる怒りの炎。

あー、何かに八つ当たりしたい気分。
ていうか、ここで私に何をしろと？

そのときだった。

後ろから声がかかったのは。

「その貴方、何をしていらっしゃるの？」
「へ……？」

ぎくりと肩をこわばらせて振り向く私。
夜中に女がうろつろしてたら、かなり怪しいよね…。
言い訳、どうしよう。

そんなことを考えながら、声をかけてきた人物の顔をぱっと見上げた。

「あら、貴方は……、いつぞやか、シンデレラを降ろしてくださいさうた…？」

「……あーっ、シンデレラのお姉様！？」

そう。

そこに居たのは、いつだったかに会ったシンデレラのお姉様その1だったのだ。

おお、なんという偶然…！

ここで、私の悪知恵が働く。
うん、この人に「働かせてくれ」って頼めばいいんじゃない！？
私ってばナイスアイディア！

「あ、あの、お願いがあるのですが…」

「何かしら。この前のご恩を返すために、やれることは何でもやりますわ」

なんていい人なんだ…！

私は目に涙を浮かべながら、これまでのことを長々と説明した。職を失ったこと、家を失ったことを、涙無しでは聞けないような感じに話す。

お姉様が、だんだんと私の話に聞き入ってくるのが分かる。うふふ、さあさ、ソーネのお話に引き込まれちゃいなさいよ。

「…と、いうわけなんです。だから、私をはたらか、」

「事情は分かりましたわ。任せてちょうだい。このお城のメイドに、空いている職があるか聞いてみるから」

…あれ。

いや、別にこのお城で働きたい訳じゃないんだけどね。って、あれえー、お姉様ってば聞いてます！？

「あ、のー…」

「大丈夫、必ず貴方の職場を探してあげますわ！」

……うーん。

まあ、これでもいいかな。

こうして、私の新しい生活が、スタートする……？
のかもしれない。

f
i
n
.

023：次への一歩（後書き）

やっと…やっと？が終わりました…。

次は？に続くので、詳しい後書きは書きません↑

もし、次のお話も読みたいと思った方は、また来週、「異世界大掃除？」をスタートさせますので、どうぞよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9900q/>

異世界大掃除？

2011年9月10日13時17分発行